Osaka Metropolitan University
Graduate School of Nursing

看護実践研究センター年報
第３巻

Annual Report
No.3，　2024

Nursing Practice and
Research Center

大阪公立大学
大学院看護学研究科
2025 年 3 月

目次

I. 看護実践研究センタープロジェクト研究・活動支援事業

センターの目的と事業内容	三輪　恭子	1
1. 看護生涯学習支援		
(1) 地域包括支援センター看護職のネットワークの構築	岡野　明美	4
(2) がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース　がん看護インテンシブコース	林田　裕美	11
(3) 看護職のための継続教育実践講座	勝山　愛	17
(4) 精神医療を支える看護職に向けたオンラインセミナーの企画・運営	河野　あゆみ	23
(5) ハイブリッド形式による集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座	佐竹　陽子	29
(6) 未来を拓く！基礎から学ぶ看護研究セミナー（基礎編・継続編）	細名　水生	35
(7) 家族への看護を考える会　家族看護フォーラム	井上　敦子	41
2. 府民健康支援		
(1) 大阪府民の健康・防災プロジェクト	田中　健太郎	48
(2) 暮らしの保健室における住民育成活動	三輪　恭子	54
(3) 発達障がいをもつ子どもの社会生活スキル(Social Skill)の獲得への支援に向けて-養育者、並びに彼らを支援する看護師等の保健医療福祉関係者が活用可能な支援の工夫を学ぶための勉強会-	奥野　裕子	60
3. 国際・国内学術研究推進		
(1) 入院患者の音環境を整えるためのベストプラクティスの構築	園田　奈央	67
(2) 同じ担当保健師の継続支援と乳幼児をもつ保護者の専門職への認識と関連研究	横山　美江	68

II. 運営員会活動

1. 闘病記文庫	古山　美穂 井上　敦子	70
2. 広報活動	藤田　寿一 山口　舞子 柱谷　久美子	71
3. 看護実践研究センター運営委員会活動報告	三輪　恭子	74
4. 会計報告	佐竹　陽子 田中　健太郎	76

III. CNS ネットワーク活動　三輪　恭子　78

看護実践研究センター規程　（令和4年4月1日　規定第116号）　86

看護実践研究センター運営委員会規定（令和４年４月１日　規定第 23 号）　88

編集後記　奥野　裕子　90

センターの目的と事業内容

看護実践研究センター（以下、センター）は、本センターは、本学設立の重点目標である高度研究型大学、高度人材育成、都市問題の解決による大阪府発展への貢献を鑑み、地元創成を目指して、府民が抱える健康課題の解決に向けた研究・人材育成・質の高い看護実践を推進します。本事業では、大阪府の看護の発展および地域住民の健康と生活の質向上に寄与するとともに、保健医療福祉における看護・ケアの未来を見据えた国際的学術拠点としての基盤を創るための研究・活動を支援しています。

本事業で助成を行う研究・活動課題には、以下の3つの部門があります。

１．看護生涯学習支援
- 看護職及び保健医療福祉関係者の人材育成
  （看護実践研究センターの人材育成事業の一環として実施するもの）
- 看護職及び関連職種との協働連携拠点となるネットワーク構築プロジェクト

２．府民健康支援
- 地域住民や保健医療福祉の従事者とのネットワーク構築プロジェクト
- 地域住民の健康増進、疾病・介護予防、療養管理に関わるヘルスリテラシーを醸成するための府民健康教育・支援プロジェクト
  （看護実践研究センターのWebページで広報活動が可能であるもの）

３．国際・国内学術研究支援
- 「国際的な共同研究推進プロジェクト」として、国外の大学、医療機関、保健・福祉施設等との共同研究
- 「研究者と実践家による共同研究推進プロジェクト」として、国内の医療機関、保健・福祉施設等との共同研究を支援の対象とする。
  （※国内の大学との共同研究は対象外とする。）

2024 年度は、選定基準として、公益性、地域社会における必要性（課題解決性）、先駆性・創造性・将来性、実現性を鑑み、看護生涯学習支援部門 7 件、府民健康支援部門 3 件、国際・国内学術研究支援 3 件（内 1 件は中止）の計 13 件が採択され、活発な研究・活動が行われました。（表 1）

（表１）

部門	No	課題	代表者	共同研究者 共同活動者
看護生涯学習支援（活動）	1	地域包括支援センター看護職のネットワークの構築（交流会）	岡野明美	藤本公恵 志村いずみ
	2	がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース（がん看護インテンシブコース）	林田裕美	田中京子　徳岡良恵
	3	看護職のための継続教育実践講座	勝山愛	細田泰子　古川亜衣美
	4	精神医療を支える看護職に向けたオンラインセミナーの企画・運営	河野あゆみ	松田光信　冨川順子 奥野裕子　柱谷久美子
	5	ハイブリッド形式による集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座	佐竹陽子	北村愛子　井上奈々
	6	未来を拓く！基礎から学ぶ看護研究セミナー（基礎編・継続編）	細名水生	森木ゆう子　冨澤理恵 重見雅子　椋木実希
	7	家族への看護を考える会　家族看護フォーラム	井上敦子	中山美由紀
府民健康支援（活動）	1	大阪府民の健康・防災サポートプロジェクト	田中健太郎	根来佐由美　安本理抄 大野志保　都筑千景
	2	暮らしの保健室における住民育成活動	三輪恭子	篠原真咲 江口陽貴　坂口晴美
	3	発達障がいをもつ子どもの社会生活スキル(Social Skill)の獲得への支援に向けて-養育者、並びに彼らを支援する看護師等の保健医療福祉関係者が活用可能な支援の工夫を学ぶための勉強会-	奥野裕子	柱谷久美子　古山美穂
国際・国内学術研究推進	1	入院患者の音環境を整えるためのベストプラクティスの構築	園田奈央	森本明子 古木秀明　小池里彩
	2	同じ担当保健師の継続支援と乳幼児をもつ保護者の専門職への認識との関連	横山美江	緒方靖恵　鈴木仁枝 堀内清華　近藤尚己 山縣然太郎 Karri Silventoinen

Ⅰ. 看護実践研究センタープロジェクト研究・活動助成事業

１．看護生涯学習支援部門

(1) 地域包括支援センター看護職のネットワークの構築

(2) がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コースがん看護インテンシブコース

(3) 看護職のための継続教育実践講座

(4) 精神医療を支える看護職に向けたオンラインセミナーの企画・運営

(5) ハイブリッド形式による集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座

(6) 未来を拓く！基礎から学ぶ看護研究セミナー（基礎編・継続編）

(7) 家族への看護を考える会　家族看護フォーラム

地域包括支援センター看護職のネットワークの構築
～交流会・コンサルテーションの開催～

岡野明美

Ⅰ．活動の背景と目的

地域包括支援センター（以下、包括）は、2006 年 4 月に創設された高齢者の総合相談、権利擁護、介護予防ケアマネジメント等を担う地域包括ケアシステムの中核機関である。2022 年 4 月末現在で全国 5,404 箇所に設置[1)]され、設置体制は、市町村が運営する直営型と民間法人に業務委託する委託型がある。その割合は、直営型 20%、委託型 80%[1)]で年々委託型が増えている。職員は、保健師等（保健師と看護師）、社会福祉士等、主任介護支援専門員等の 3 職種の配置が義務づけられている。1 施設における平均配置人数は、保健師等 1.7 人、社会福祉士 1.9 人、主任介護支援専門員 1.5 人[2)]である。包括所属保健師の実態は、保健師歴 10 年未満が 5 割を超し、多くは 1 人配置[3)]で、市町村単位の創設のため市町村を越えたつながりを持ちにくい。また委託型包括の保健師は行政保健師のようにキャリアラダーが示されておらず[4)]、研修体制等人材育成の状況が異なる。これらから委託型包括の保健師は行政保健師と異なる環境にある。これらから保健師職の困難感には、業務の偏りによって本来の保健師活動に支障がある[5)]、保健師 1 名配置が多く実践力が向上できない[5)]、求められる役割が認識しづらい[6)]、委託型包括であることでの活動のやりにくさ[7)]等が報告されている。また、包括所属保健師を対象とした研究活動を行う中で「他の保健師はどのような活動をしているのか」「保健師とは何だろう」[8)]「支援が解決につながらない葛藤」「在宅継続か施設入所の見極めへの迷い」「ケアマネジメントや権利擁護等業務は公衆衛生看護学の学問基盤だけでは太刀打ちできない」等の語り[9)]がある。

そこで、地域包括支援センター保健師職のネットワークの構築を目指して、包括所属保健師らが集い横のつながりをもつこと、互いの状況を理解し合い、エンパワメントできることを第一段階の目的として交流会を企画し活動を開始した。活動の振り返りから交流会が活動や悩み・不安の共有、保健師の役割・専門性へのジレンマ等が語られ、参加者のニーズを把握するとともに、交流会開催の意義を確認することができた。従って本年度も交流会を継続して実施することとなった。本年度は自立支援をテーマに交流会に取組んだ。

Ⅱ．活動方法

１．参加者

地域包括支援センターに所属する保健師、看護師、その他活動の関係者

２．活動運営

本学大学院看護学研究科教員の他、本学大学院看護学研究科 CNS コース修了者が運営に携わった。本学大学院看護学研究科 CNS コース修了者は関連学会 WS で活動の発表及びコンサルテーション実施にも貢献した。本学大学院看護学研究科教員は周知・参加申し込みへの対応および WS での発表に携わった。また、地域包括支援センター実務者および地域包括支援センターを対象に研究している教

育・研究者等学外者も運営や関連学会 WS での発表に携わった。

３．募集方法

主に近畿内の地域包括支援センター800 施設にチラシを郵送するとともに、本学看護実践研究センターホームページに日程を掲載した。また運営スタッフからも積極的に関係者に参加を呼びかけた。

４．活動の全体像

活動場、関連学会 WS とオンラインでの交流会の開催、コンサルテーションの実施であった。

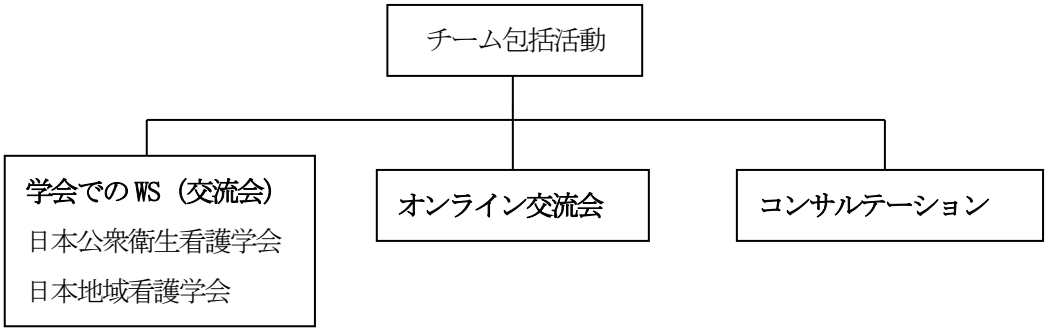


図１活動の全体像

Ⅲ．活動結果

１．　活動内容

１）関連学会 WS2 回、zoom 交流会 3 回を実施した。テーマを設定し、テーマに関連した活動報告、研究報告、グループワークを実施した。所要時間は 80 分であった。

２）個別相談を希望者にコンサルテーションを 1 件につき 3 回実施した。

２．交流会及び学会 WS

１）活動内容と参加者数

日時	テーマ	参加者数
2024 年 6 月 17 日 10：00～11：10 zoom 交流会	個別の自立支援 　本人の自立支援どうしてる？	30 名 （申込 35 名）
2024 年 6 月 29 日 日本地域看護学会 第 27 回学術集会	認知症高齢者の生活支援ってどうしていますか？ ～地域包括支援センター保健師職における交流会活動を通して～ ・研究報告「地域包括支援センター3 職種の認知症高齢者のコーディネーションの現状と特徴」 大阪府立大学大学院看護学研究科　岡野明美 ・実践報告「～チーム包括の取り組み～コロナ禍に負けない工夫から」 京都府木津川市地域包括支援センター木津東　保健師・地域看護専門看護師　藤本公恵 大阪府四條畷市にし地域包括支援センター　主任介護支援専門員・地域専門看護師　志村いづみ ・ディスカッション 「認知症高齢者の生活支援ってどうしていますか？個別支援から地域づくり、多職種連携について」	19 名

2024年10月19日 10：00～11：10 zoom交流会	関係機関との自立支援 　事業所の意識を変えるには？	45名（申込77名）
2025年1月5日 日本公衆衛生看護学会第１３回学術集会	地域ぐるみの自立支援の推進に向けて ・研究報告「男性高齢者の社会活動への参加要因　～活動参加に向けた支援を考える～」 　久留米大学医学部看護学科　森永　朗子 ・実践報告「地域包括支援センター委託元である行政保健師の立場から」 　東大阪市役所福祉部高齢介護室地域包括ケア推進課 　坂東亞衣子 ・ディスカッション 「地域ぐるみの自立支援に向けた取り組み」	18名
2025年2月15日 10：00～11：10 zoom交流会	地域との自立支援 　当事者・家族・地域住民の意識を変えるには？ 　「予防」という考えの啓発	42名 （申込75名）

２）アンケート結果

アンケート回答協力者　96名（述べ数）

（１）参加者の概要

所属先	回答数（%）
直営型地域包括支援センター	3 (3.2)
委託型地域包括支援センター	66 (71.0)
行政機関	8 (8.6)
教育機関	12 (12.9)
その他（医療機関、大学院生）	3 (3.2)
未回答	1(1.1)

（２）参加目的（重複回答）

質問項目	回答数（%）
テーマに興味があった	43(46.2)
交流をもちたかった	58(62.4)
情報を得たかった	21 (22.6)
過去に参加してまた参加したいと思った	5 (5.4)
その他	2(2.2)

（３）参加回数

初めて　42（45.2）　　2回以上　49（52.7）　未回答2(2.2)　　＊再掲3回以上（28.0））

（4）地域包括支援センターの保健師として働く上で感じていること（自由記載）

分類	記載内容
保健師職の専門性の活かし方	保健師の役割、専門性を出して仕事をするにはどうすればよいのか、保健師としての役割が期待されているとは思えない現状がある
	看護師としての経験は充分に生かせてない気がする
	職種における特色的な役割訳は特になく業務を行っている
	困難ケースの対応も介護予防の取り組みも全て保健師の職能であると現場の保健師が気づいていない
業務量の多く、保健師業務が十分できないジレンマ	ケアプランのチェックや給付管理に時間がかかり、保健師としての業務に手が回らない
	日々の業務に追われ（自プラン A,B,地域訪問健康体操の団体回り、サロンなどの健康啓発活動、相談業務、申請代行、委託契約虐待対応、認知症対応、数々の会議）、本来の地域診断などの保健活動はなかなかできないジレンマがある
	今後、増々高齢化が進んでいく中で包括の役割も重要となってくるが職員一人ひとりの負担も増えていくジレンマ
	相談業務と地域活動との両立にもっと人員がほしい
困難事例の対応	受診を拒む人との関り
	地域と関わりたがらない方への支援
	精神疾患に関わるご近所トラブルなどが多く、受診への繋ぎや家族にも同様の精神疾患があり重層的な問題を抱えるケースが多い
	困難な事例に時間がとられる
	高齢者自身が長年生活してきた中で様々な健康問題を抱えているので変化を受け入れてくれない説明や取り組みの難しさ
	はざまの方をどう支えるか
行政機関との連携	市町村との温度差を感じ行政も縦割なので情報共有や協力が出来るのか不安に思う
	地域課題と行政の方針との差が大きい。行政が地域の実情に合っていない
	行政保健師（保健福祉センター）との関係づくり
	障害福祉との連携に課題を感じる。65 歳以上になると介護保険優先で進めるがその人にとって何が必要な支援なのかをしっかり検討してから移行できるよう、事例検討や、支援者会議などが有効に行えるような仕組みができるとよい
	区・行政の保健師の難しさ
	基幹型包括の役割。委託先の法人によって考えが異なること
介護予防事業の展開方法	前期高齢者の健康教室の在り方
	介護予防教室の参加者に男性が少なく、男性への支援が課題である
	介護予防体操などを継続したいと思うが住民の方の自発的な意識が少なくリーダーや指導者になってくれる方がいない現状がある
	異なる法人の包括同士で介護予防や自立支援を展開する方法
	予防＝運動に特化した取り組みがメインになっていて、健康障害に対しての予防の取り組みが難しい
自立支援の現状	自立支援の効果の可視化
	経験が浅く、住民に自立支援について上手く説明することができなくて悩むことが多い

	自立についての意識が低かったことや具体策として新たな発想が必要と再認識した
	自立支援にむけて本人の意識、専門職の意識が低いと感じた
地域支援活動	社会資源の作り方
	インフォーマルな資源開発にも力を入れたいが地域の担い手にも課題がある
	認知症があっても過ごしやすい地域づくり、地域ケアシステムの構築を図る機運が高まっているが、どのように取り組んでいくと実現できるのか
	地域とのつながりをもちながら住民を動かすこと
	介護保険サービス利用がない方の見守り訪問の方のつなげ先
地域包括支援センター活動の周知	包括支援センターの役割を地域に知ってもらうための工夫
	コロナの変異やワクチンの進化など高齢者への周知に困っている
地域包括支援センターの環境	保健師としての強みを生かしていることを共有してモチベーションを上げて、保健師が長く働ける環境を作っていきたい
	自分が一番上になってしまったため、これから目標とする人物像がいない
	3職種の考え方、価値観の違い

（5）参加の感想（自由記載）

分類	記載内容
元気になった	いろいろな方々とお話をするのは刺激になり活力になる
	元気をもらった
	とても楽しかった
	交流会の場で皆様の活躍に私も頑張っていきたいと感じた
	自分の意見を発言したり、ほかの方の意見もよく見えるようになったため議題以外のことについても話し合ったが大変参考になった
他包括の活動を聞けて役立つ	多職種連携について参考となる意見があった。また、他の包括がどのような活動をしているのか知ることができてよかった
	中々知り合えない包括職員と話せて良かった
	他の事業所の話がきけてよこのつながりができてうれしい
保健師としての振り返りの機会になった	保健師としての強みを生かしていることを共有してモチベーションを上げて、保健師が長く働ける環境を作っていきたい
その他	学会の中で行政保健師がメインの中、包括保健師に焦点を当てたワークショップがあったことがともて心強かった

（6）今後取り上げてほしいテーマ

・困難事例への支援（高齢者虐待予防・精神疾患）

・包括内（3職種間やセンター長との関係性）、市役所や他職種、医療機関との連携

・保健師職としての専門性

・地域支援活動（介護保険の使い方の周知、インフォーマル資源の創出）

４．コンサルテーションの実施

６件の申し込みがあり、チーム包括内の地域看護専門看護師２名で対応を行った。本年度のコンサルテーション希望者の共通点は、前歴が看護師で地域包括支援センターの就職により保健師業務を行うというところにあった。主な相談内容は、保健師としての役割、地域支援の進め方、スキルアップの方法、医療的支援、地区診断などであった。概ね３回のコミュニケーションによって自分なりの方向性を掴んでいた。

また昨年度実施したコンサルティーは、交流会への参加、学会 WS での活動報告など活動が広がっていることが確認できた。

Ⅳ．活動の振返りと今後の活動に向けて

１．活動の振返り

Zoom での交流会の参加者数は､30～40 名であり交流会のニーズは継続されていることが分かった。方法は､オンラインを用いたことで自宅あるいは職場から数人での参加など参加の利便性はよかった。しかし、土曜日開催となるため直営型は参加しにくい傾向はこれまでと同様であった。参加者数は 10 月以降の増加はチラシの郵送配付であった。今年度も周知方法としてのチラシの郵送は大きいことが分かった。学会での WS では対面実施が再開されたことから 20 名程度の参加があった。参加者は、日本地域看護学会では教育機関、日本公衆衛生看護学会では保健師（行政・包括）があった。交流会参加２回以上の者が５割で続けての参加者が増えている傾向にあった。

交流会の効果は、同職種と活動内容や悩みを共有することでの安心感や勇気を得ていた。また他包括の活動を聞いて今後のかつどのヒントを得たていた。教育機関所属者は、包括の実情を知る機会や研究・教育のヒントを得ていた。しかし、根強く保健師の専門性への悩みやジレンマを抱えて参加していることが読み取れた。これらから活動の行動目標としてあげている、情報交換や交流を図ることで、抱える葛藤や悩みが軽減されていることや保健師職の役割について考えることができていることがアンケート結果から推測される。一方、自分なりの答えを見出し、役割を行動できるには至っていない現状を把握した。

コンサルテーション件数は昨年度よりも増えニーズがあることを確認できた。共通性として前職看護師の者が保健師職として活動することへの悩みであった。これらの傾向を今後も把握することで研究活動につなげていくことができると考える。

以上から、保健師等の横のつながりをもつこと、互いの状況を理解し合い、エンパワメントできるに関して成果はあったと考え、活動を継続していく必要性を確認できた。

２．今後の活動に向けて

交流会ならびに学会 WS を継続することで行動目標としている､｢包括保健師職のつながる場が持て、情報交換や交流が図れる｣ことは達成されている。またアンケート結果から「抱える葛藤や悩みの軽減」や「活動の振り返り、活動へのモチベーション」につながっていることが読み取れた。コンサルテーションの成果としては､｢活動を振り返り自分なりの答えを見出せている｣が件数は少ない。また

「包括保健師職の役割を行動できる」には活動全体を通じて至っていない。今後は「自分なりの答えを見出し、役割を行動できる」行動目標の達成に向けて活動を発展させていきたい。そのため、コンサルテーションの件数拡大、新たに課題別ワーキングを実施する予定である。

引用文献

１）厚生労働省：地域包括支援センターについて.
https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/001088939.pdf（2024年１月12日）

２）三菱 UFJ&コンサルティング：地域包括支援センターが行う包括的支援事業における効果的な運営に関する調査研究事業報告書, https://www.murc.jp/ uploads/2018/04/ koukai_180418_c5, 2018（検索日：2024年1月29日）

３）日本看護協会：地域包括支援センター及び市区町村主管部門における保健師活動実態調査報告書. https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/senkuteki/2014/ 25-chiikisien. (2024年1月30日).

４）田中裕子, 工藤禎子：地域包括支援センターの保健師の人材育成に関する研究・報告の動向. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 28：21-30, 2021.

５）川原瑞代,杉田加代子,児玉智恵子,小野美奈子,：地域包括支援センターの機能強化に関わる保健師の活動実態と課題. 宮崎県立看護大学看護研究・研修センター事業年報,3：33－42, 2014.

６）若杉里実：新任保健師１年目の体験―保健センターと地域包括支援センター保健師の比較―. 岐阜看護研究会誌, 4：13-19, 2012.

７）富田恵,大沼由香,小池妙子,工藤雄行, 寺田富二子, 中村直樹：委託型の地域包括支援センター保健師のネットワーク構築に関する認識. 弘前医療福祉大学紀要,6(1)：91-98, 2015.

８）岡野明美、古賀佳代子 , 曽我智子, 小林奈緒子：地域包括支援センター保健師の役割と葛藤. 第６回日本公衆衛生看護学会学術集会抄録：92, 2018.

９）岡野明美,古賀佳代子, 曽我智子, 小林奈緒子, 保母恵, 永井潤子：地域包括支援センター保健師の役割～他組織との連携から～. 第８回日本公衆衛生看護学会学術集会抄録：97, 2020.

がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース
（がん看護インテンシブコース）

林田裕美･田中京子･德岡良恵

1. 背景

がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース（以下、がん看護インテンシブコース）は、2017 年～2021 年度に大阪府立大学大学院看護学研究科が取り組んできた 7 大学連携個別化がん医療実践者養成プランの継続事業である。7 大学連携個別化がん医療実践者養成プランは、文部科学省の大学教育再生戦略推進費「多様な新ニーズに対応する『がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）』養成プラン」で採択されたプロジェクトであり、近畿圏の国公私立大学の医学・看護学・薬学・理工学系の大学院研究科が相互連携し、多様化する新ニーズに対応した個別化医療を実践できるがん専門医療人を養成することを目的としたものであった。2021 年度に 7 大学連携個別化がん医療実践者養成プランは終了したが、がんの臨床現場においてがん患者の抱える課題について、地域の看護師に対する教育の継続が必要と考え、2022 年度から看護実践研究センターの看護生涯学習支援部門の活動として実施した。

2. がん看護インテンシブコースの目的

がん看護に携わる看護職者が、様々なライフステージにあるがん患者の抱える課題（遺伝性がん、認知症を持つ高齢がん患者の支援）について理解し、がん患者が抱える課題を克服できるような支援を考案し、実践できるようになることを目指す。

3. 活動内容

1）広報活動：

2024 年 6 月初め　チラシ（資料）をがん診療連携拠点病院や訪問看護ステーションなどに配布した。

2）対象者：がん看護に携わる看護職者、看護系大学院生、2 日とも受講可能な応募者 48 名で、両日とも参加した者は 40 名（8/29：44 名、9/13：40 名）だった。

3）場所：大阪公立大学　I-site なんば

4）開催日時と内容

（1）講義・グループワーク

●「認知症のある高齢がん患者への支援」

日時：2024 年 8 月 29 日（木）14 時～16 時 30 分

講師：宇野さつき　先生（ファミリー・ホスピス株式会社　ファミリー・ホスピ

ス神戸垂水　ホーム長　がん看護専門看護師）

内容：認知症やそのタイプ、症状、認知症ケア、認知症のあるがん患者の課題と対応、看護師の役割について講義があり、認知症患者とのコミュニケーション方法として、ユマニチュードやバリデーションの技法について説明された。アイコンタクトやスキンシップの必要性、傾聴、繰り返し、開かれた質問などをグループで行い、ディスカッションを行った。

●「遺伝性腫瘍を有する患者と家族への支援」

日時：2024 年 9 月 13 日（金）14 時～16 時 30 分

講師：細田志衣　先生（聖路加国際病院　看護部　がん看護専門看護師）

内容：遺伝子変異とその情報の特性、ゲノム医療で活用される遺伝子検査、遺伝性腫瘍の特徴や種類、看護の役割などについて講義があった。中でも乳がん卵巣がん症候群（Hereditary Breast Ovarian Cancer: HBOC、以下 HBOC）の事例を取り上げ、受講者が患者と家族の看護支援について理解を深め、知識を活用できるようグループワークでディスカッションを行った。

（2）事後レポート提出

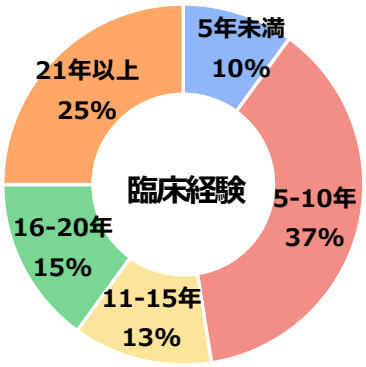
「遺伝性腫瘍を有する患者と家族への支援」「認知症のある高齢がん患者への支援」の講義・グループワーク終了後、学びについてそれぞれ記載し、コース終了後 9 月 20 日までに提出してもらった。事後レポートを提出した者は 42 名だった。

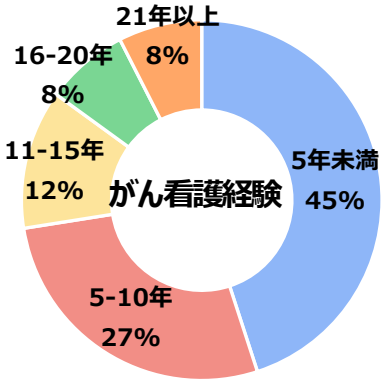
4. アンケート結果

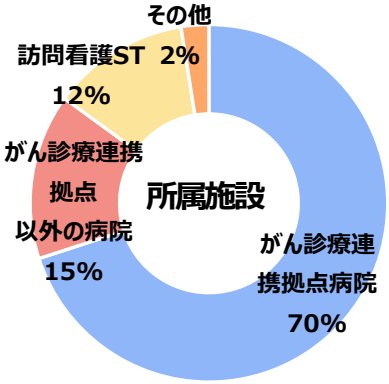
1）事後アンケート：9 月 13 日のコース終了後、アンケートを実施した。40 名から回答があった（回収率 100%）。

（1）参加者背景（臨床経験・がん看護経験・所属施設）

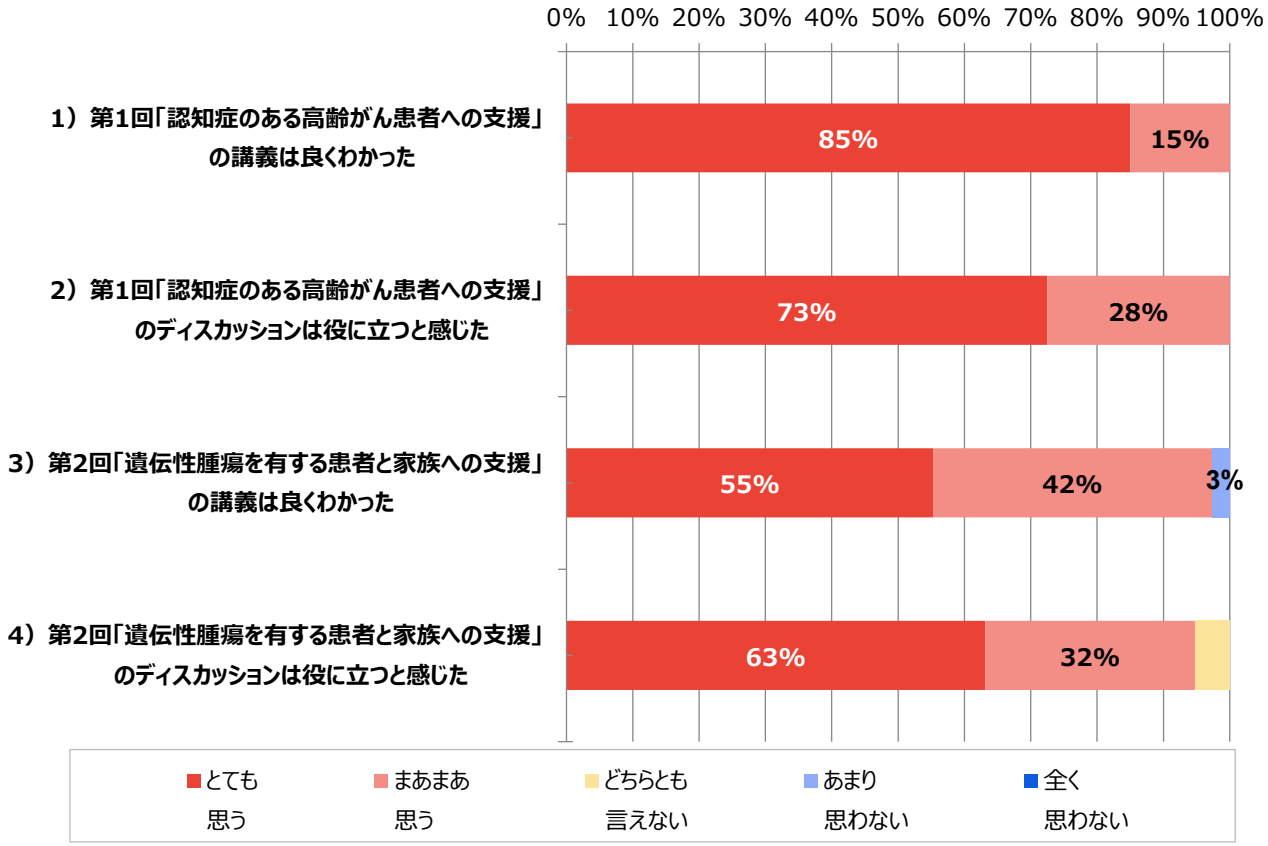
本年度は臨床経験 10 年以下が 47%を占め、11 年～20 年以下 28%、21 年以上が 25%で臨床経験年数の少ない者が多く、がん看護経験年数でも、10 年以下が 72%（昨年度 61%）だった。所属施設は、がん診療連携拠点病院が 70%を占め、昨年度の 66%と同様であった。また、訪問看護ステーションが 9%から 12%に微増した。







（2）がん看護インテンシブコースの講義・ディスカッションについて
（個人ワーク・グループワーク含む）



（3）コース全体を通して学んだこと、今後の実践に活用できること（抜粋）

＜コース全体について＞

・院内での研修ではわかりにくいことが短時間で理解出来ることが出来、講義が充実していると感じた。
・認知症のある高齢がん患者さんや遺伝性腫瘍のある患者・家族について理解したうえで、本人の思いや意向を確認しながら、必要な情報を提供・支援していきたい。
・高齢者・遺伝の看護について、新しい知識や、今までの知識の振り返りとなった。またディスカッションを通して、様々な施設で働かれる方の意見を聞くことで、学びが深まった。
・実際現場で働いていて”ここまでできていなかった”と思うことがあり、反省とともにもっとしっかり患者や家族の思いやバックグラウンドを聞いていくようにしようと思いました。「忙しくて時間がない…」ということが多かったですが、そういった時間がとれる勤務体制にすること、後輩育成をしていくことを明日から行っていきます。
・癌分野の経験が少なく感情移入することがあります。ネガティブにとらえず、その人の価値観を知り正しい情報提供を行い支援していけるよう取り組みたいです。そのためにも専門チームや多職連携を積極的に実践していきたいです。
・日常の業務ではゆっくり考えることができなかった患者・親族への対応を改めて振り返ることができました。疾患への知識の重要性を再確認しました。日々の学びを増やしていこうと思います。
・否定しない、向き合えないことも受けいれる。向き合えている時期を見極めることの大切さを学びました。そのためにも長い付き合いになるだろう、信頼関係を築いていきたいと思います。
・認知症の方や遺伝性腫瘍の方などのどういう風にコミュニケーションをとらないといけないか、とっていくといいか具体的に考えていくことができ、今後の実践でも、目線をあわせたり、なぜそのように考えるのかといった理由を聞いていったりすることをしていこうと思いました。
・患者さんと１対１で丁寧に話を聞くことがまず看護の第１歩だと感じました。限られた時間で少しでも時間がとれるようつとめたいと思います。
・どちらの講義も、先生方の経験した事例を混じえて教えてくださったので経験の浅い私にはいろいろな学びを

得ることができた。特にディスカッションは普段話す機会のない人たちからの視点を知ることができた。
・患者のトータルペインをしっかり把握することや、その人自身のライフスタイルや今後どうしていきたいかという思い・課題について一緒に向き合っていくことが、今後治療するにあたっての始まりなんだと思った。
・2 回それぞれ全く異なるトピックスで自らの看護を振り返り、また新しい情報、看護力をさらに高められる機会となりました。本当にありがとうございました。

・・・など

〈各講義について：認知症のある高齢がん患者の看護〉
・認知症の講義も臨床で日々困っていることばかりで、どのようにかかわるべきかスタッフと共有できたらと思っています。
・認知症のある高齢がん患者への支援は改めて認知症や高齢者への対応を考え目をあわせて、1 つ 1 つはきはきとしたうけこたえをすることで、今までよりも自分の話を聞いてくれているように感じています。
・すぐに臨床で活用できました。
・認知症のある高齢がん患者さんへの対応や意思決定について見直すきっかけになりました。
・患者さんの言うことを否定せず聞くことを実践に活用しています。
・「認知症のある高齢がん患者への支援」では現場で実践できる Pt との関わり方を学ぶことができた。

・・・など

〈各講義について：遺伝性腫瘍を有する患者と家族の看護〉
・遺伝性腫瘍では知らなかった知識だったので視点が広がった。今後看護する上で一歩ふみこんだ話ができると思う。
・遺伝的なことに対しては、院内に遺伝カウンセラーがいるのでその方への橋わたしをすることが多い、ゆっくり話を聞く時間がないことが多い。私を信頼して話していることも多いので、時間を作りゆっくり話せることが大切だと改めて考え、又、新しい情報を常にしいれていきたいです。
・遺伝性腫瘍の講義では、知らないことが多く、予防的切除などは別の国の話かと思っていたところもうされている施設もありおどろいています。外来でその情報も患者さんに活用していきたいと思います。
・乳がん患者の診断時に診察同席することがあります。BRCA 検査についても説明され、検査受ける事を迷っておられる方もいらっしゃいます。その方の価値観を大切に支援していきたいと思います。
・遺伝性腫瘍の患者さんと関わった機会がなかったので、とても勉強になりました。国ではがん対策に力を入れてる一方で、未発症の方の検査は自費ということにとても矛盾していると感じ、今後解決していかなければならない問題だと考えました。
・遺伝性腫瘍を有する患者と家族の支援については、本人だけじゃなく家族のことも含めて人生に深くかかわる立場に立っていると思うので、もしその患者さんと関わることがあれば、患者さんの抱いている思いを引き出せるように接したいと思います。

・・・など

(4) 講義・ディスカッション、時間配分など

＜講義・ディスカッションについて＞
・働いている地域も年齢も様々な看護師の皆様とディスカッション出来て有意義な時間でした。
・ディスカッションでは、病院・施設、訪看など看護実践の場が異なる方々と意見交換でき共感できるところ、新しい視点の気づきなどがあり大変有意義だった。
・話も聞きやすく、他のグループの意見もきくことができて勉強になりました。今後の看護に役立てることができると思いました。
・先生々のお話は資料も含めてとても分かりやすかったです。
・講義の合い間にディスカッションの時間を設けて頂き講義内容をより理解することできました。

・・・など

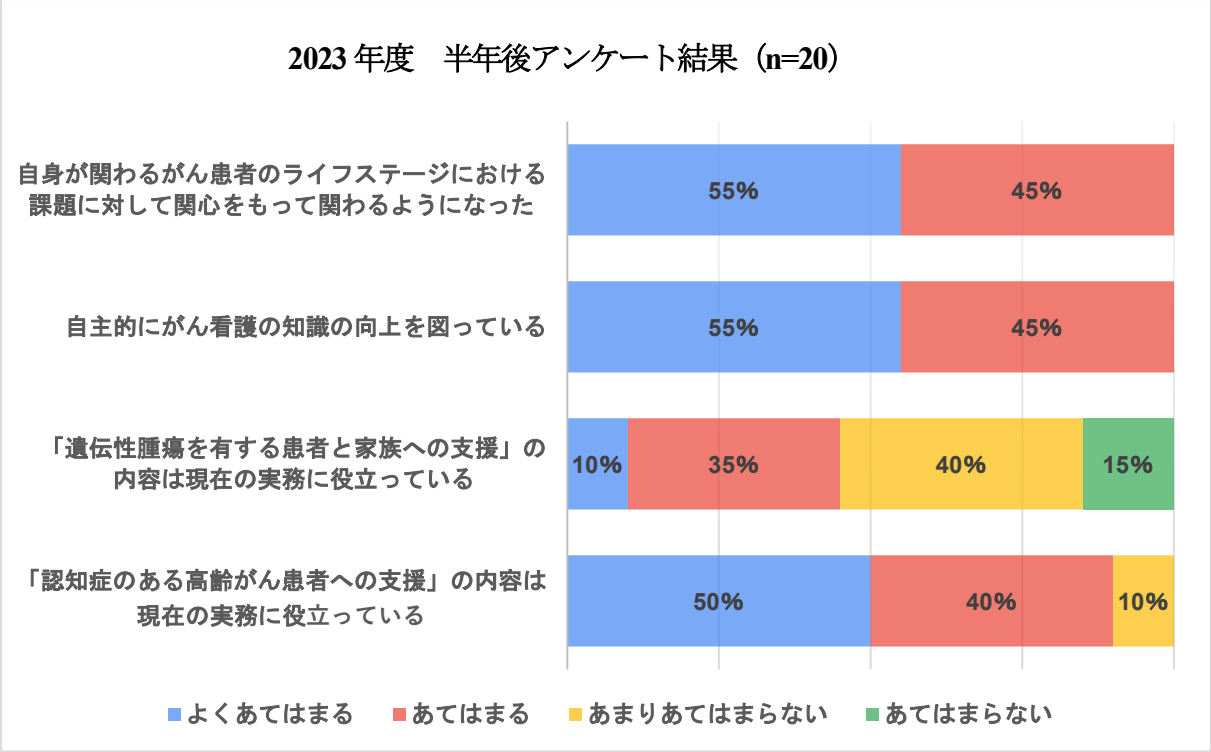
＜時間配分について＞
・ディスカッションする時間が短すぎるので話す人が決まってしまうような感じになります。2 時間半の講義時間はすごく集中できて良かったです。
・講義の時間は、説明もわかりやすくちょうどよい時間だったと思います。ディスカッションの時間がもう少し長くとれるとよかったなと思います。（毎回、ギリギリだったり、話がまとまらずに終わってしまうことがあったので…）
・時間配分も適切だったと思います。

・・・・など

2) 半年後アンケート：本インテンシブコースでの学びをどのように活用できているかについて、2024 年 3 月（2023 年度受講者対象）、および 2025 年 2 月（2024 年度受講者対象）に実施した。

2023 年度半年後アンケート結果について、以下に示す。

半年後アンケートへの回答者数は 20 名（回収率 57%）であった。回答者全員、自身が関わるがん患者のライフステージにおける課題に対して関心をもって関わるようになった、自主的にがん看護の知識の向上を図っていると回答した。本コースの内容が現在の実務に役立っているかどうかは、普段、受講者がかかわっている対象がどのライフステージにあるかが結果に影響すると考えられるため、どの施設でもかかわることが多い認知症のある高齢がん患者への支援の内容が役立っているとの回答が多くなったと考える。



5. 終わりに

本コースは、2021 年度から 3 年間開催し、両日とも参加した者は合計 129 名であった。提供された内容は、第 4 期がん対策推進基本計画でも課題として挙げられており、近年のがん医療のピックスであり、臨床現場で看護職者が学びたい内容であったと考える。また、昨年度より対面で開催し、他施設の受講者同士が熱心にディスカッションし、相互に学びを深めていた。以上より、近畿圏内のがん看護の質向上に寄与したと考える。

資料　配布したチラシ

大阪公立大学大学院看護学研究科／阪神5大学サステナブルがん人材養成プラン

2024年度 大阪公立大学大学院看護学研究科

がん患者のライフステージにおける課題対応を志向した看護師養成コース

（がん看護インテンシブコース）

様々なライフステージにあるがん患者の抱える課題について理解し、がん患者が課題を克服できるような支援を考察できるようになることを目的としたコース（全2回）です。講義とディスカッションを組み合わせて行います。

対象　がん看護経験のある看護師・看護系大学院生
2回とも受講でき、アンケート回答にご協力いただける方

定員　30名程度　（参加費無料）

場所　大阪公立大学 I-siteなんば
大阪市浪速区敷津東2丁目1－41　南海なんば第1ビル2階

◀ アクセスの詳細はこちらから

第1回

8/29（木）
14：00～16：30

「認知症のある高齢がん患者への支援」

講師

宇野 さつき 先生
（ファミリー・ホスピス株式会社　ファミリー・ホスピス神戸垂水ハウス ホーム長・がん看護専門看護師）

第2回

9/13（金）
14：00～16：30

「遺伝性腫瘍を有する患者、家族への支援」

講師

細田 志衣 先生
（聖路加国際病院 看護部 がん看護専門看護師）

全講義終了後～9.20（金）　「インテンシブコースでの学び」について ミニレポート提出

申込方法　下記URL（またはQRコード）にアクセスし、専用申込フォームに必要事項をご入力のうえ、お申し込みください。

https://forms.gle/kPmwNBa8VtDX4nAQ7

- 同一アドレスで複数名のお申込みは出来ませんので、各自で参加申込みをお願いいたします。
- 受講の可否および当日の参加方法については別途ご連絡いたします。

申込期間▶2024年6月10日（月）～　※定員になり次第締め切ります

※お申し込みいただく際、申込フォームに記載されている注意事項をよくお読みください。本コースを過去に受講された方は応募人数によってはご遠慮いただく場合がございますので、予めご了承ください。
※gr-nurs-ganpro@omu.ac.jpからのメールが受信できるよう、設定をお願いいたします。
※お申込みいただいた個人情報は、阪神5大学サステナブルがん人材養成プラン関係のみに使用させていただきます。

お問い合わせ　大阪公立大学大学院看護学研究科　がんプロ事務局
〒583-8555 大阪府羽曳野市はびきの3-7-30　e-mail:gr-nurs-ganpro@omu.ac.jp

看護職のための継続教育実践講座

勝山　愛、細田　泰子、古川　亜衣美

１．活動目的

本活動は、看護職者を対象とした講座を実施し、看護教育に関する基本的な理論に基づいて継続教育における実践方法について考える機会を提供することを目的とする。活動を通して看護継続教育の質の確保における社会貢献ができると考える。

２．活動内容

１）　受講者

大阪府内の医療施設に所属する看護職者を受講対象にした。大阪府内の医療施設のうち病床数の多い順から 55 施設を選択し、看護部長宛てに講座の案内状とポスターを送付し、受講希望者を募った。さらに看護実践研究センターのリーフレット送付時、2200 施設にチラシを同封した。各講座 20 名程度とし先着順とした。

２）　講座の方法

対面で講義やグループワークを行った。場所は I-site なんばで開催した。

３）　講座内容

1 回 2 時間の講座を 3 回実施した。本学看護教育学教員で実施し、本学教員が作成した講義資料を教材として使用した。講座内容については表 1 に示す。

４）　講座評価

講座終了時には受講者に講座アンケート(所要時間約 5-10 分)の実施にご協力いただいた。

５）　活動状況

（1）　受講申し込み者と当日受講者

第 1 回は、受講申し込み者 16 名で当日受講者は 15 名であった。第 2 回は申し込み者 19 名で当日受講者は 16 名、第 3 回は申し込み者 27 名で当日参加者は 21 名であった。

表 1　看護職のための継続教育実践講座の内容

回	日時	内容	講師
第 1 回	10 月 9 日（水） 13：30〜15：30	正統的周辺参加論とメンタリング	古川　亜衣美
第 2 回	11 月 25 日（月） 13：30〜15：30	成人学習理論の看護における活用	勝山　愛
第 3 回	12 月 4 日（水） 13：30〜15：30	臨床判断モデルとルーブリックの活用	細田　泰子

（2） アンケート結果

① 第 1 回　「正統的周辺参加論とメンタリング」について

・ 受講者 15 名から回答が得られた。

・ 受講者の看護職経験年数は、5 年未満 2 名(13.4%)、15～19 年 2 名(13.4%)、20～24 年 1 名(6.7%)、25 年以上 10 名(66.5%)であった。

・ 受講者の役職については、看護師長 5 名(33.3%)、副看護師長 1 名(6.7%)、看護主任 2 名(13.3%)、副看護主任 1 名(6.7%)、スタッフ 3 名(20%)、その他 3 名(看護部長・大学院生・看護協会教育事業担当:20%)であった。

・ 講座の内容については図 1～3 に示す。内容の理解については、とても良く理解できたが 11 名(73.3%)、理解できたが 4 名(26.7%)であった（図 1)。教育実践に役立つかについては、とても役立つが 10 名(66.7%)、役立つが 5 名(33.3%)であった（図 2)。満足度は、満足できたが 11 名(73.3%)、ほぼ満足できたが 3 名(20%)、普通が 1 名(6.7%)であった（図 3)。

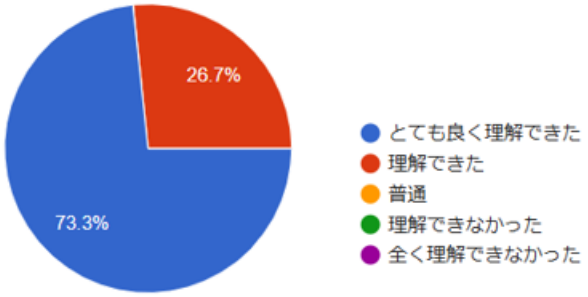


図 1. 内容理解

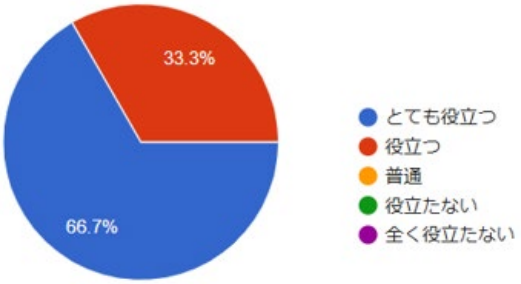


図 2. 有用性

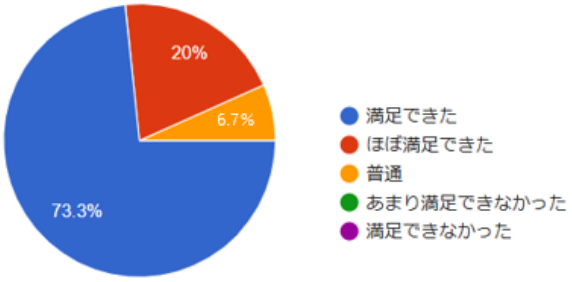


図 3. 満足度

② 第 2 回「成人学習理論の看護における活用」について

・ 受講者 15 名から回答が得られた。受講者の看護職経験年数は、5 年未満 1 名(6.7%)、5～9 年 0 名(0%)、10～14 年 0 名 (0%)、15～19 年 1 名(6.7%)、20～24 年 5 名(33.3%)、25 年以上 8 名(53.3%)であった。

・ 受講者の役職については、看護師長 4 名(26.6%)、副看護師長 3 名(20%)、看護主任 2 名(13.3%)、副看護主任 1 名(6.7%)、スタッフ 3 名(20%)、その他 2 名(看護部長・次長：13.4%)であった

・ 講座の内容については図 5～7 に示す。内容の理解については、とても良く理解できたが 7 名(46.7%)、理解できたが 8 名(53.3%)であった（図 5)。教育実践に役立つかについては、とても役立つが 10 名(66.7%)、役立つが 4 名(26.7%)、普通が 1 名(6.7%)であった（図 6)。満足度は、満足できたが 11 名(73.3%)、ほぼ満足できたが 4 名(26.7%)であった（図 7)。

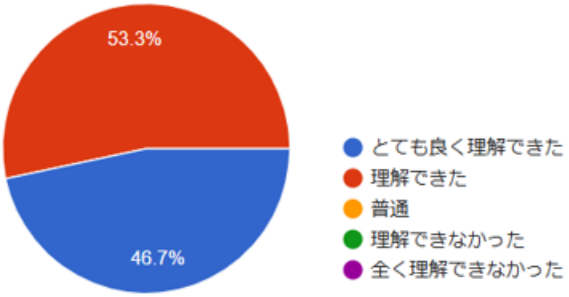


図 5. 内容理解

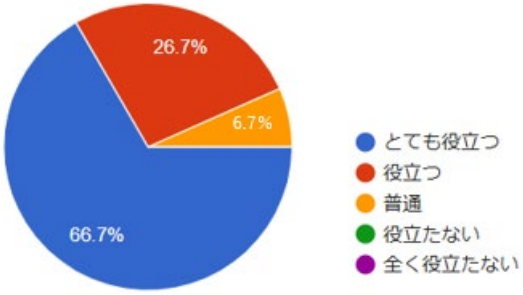


図 6. 有用性

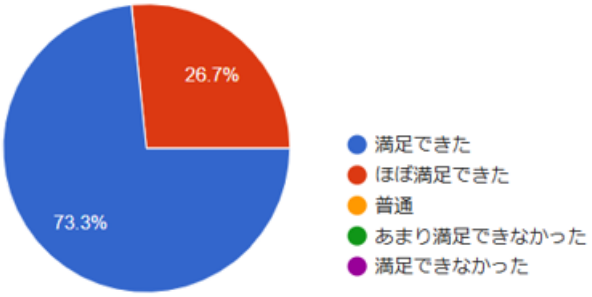


図 7. 満足度

③ 第 3 回「臨床判断モデルとルーブリックの活用」について

- 受講者 20 名から回答が得られた。
- 受講者の看護職経験年数は、5 年未満 1 名（5%）、15～19 年 2 名（10%）、20～24 年 2 名（10%）、25 年以上 15 名（75%）であった。
- 受講者の役職については、看護師長 11 名（55%）、副看護師長 3 名（15%）、看護主任 2 名（11%）、副看護主任 1 名（5%）、スタッフ 1 名（5%）、その他 2 名（看護部長・退職後：10%）であった。
- 講座の内容については図 9～11 に示す。内容の理解については、とても良く理解できたが 6 名（30%）、理解できたが 6 名（30%）、普通 8 名（40%）であった（図 9）。教育実践に役立つかについては、とても役立つが 8 名（40%）、役立つが 8 名（56%）、普通が 4 名（20%）であった（図 10）。満足度は、満足できたが 8 名（40%）、ほぼ満足できたが 7 名（35%）、普通が 4 名（20%）、あまり満足できなかったが 1 名（5%）であった（図 11）。

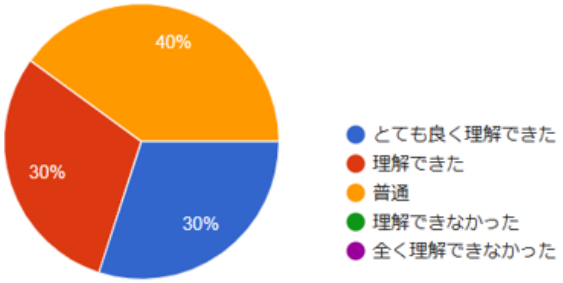


図 9. 内容理解

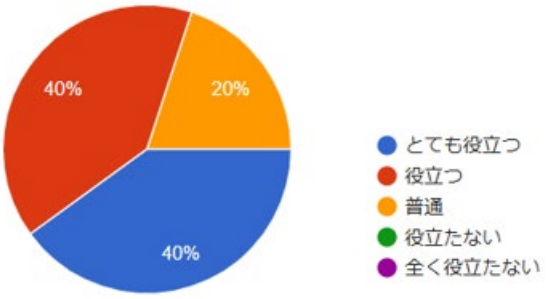


図 10. 有用性

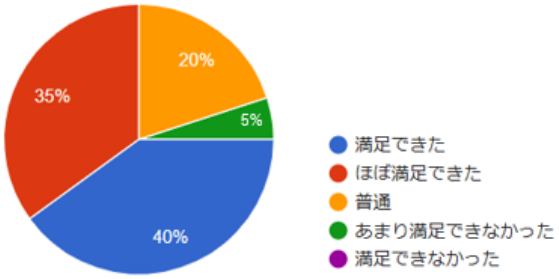


図 11. 満足度

④自由記載について

教育実践での有用性については以下のような意見があった。

（第１回）

・新人教育に携わり、指導者も様々なタイプがいてみんなで足並みを揃えるのに理論に基づいて考えていきたいです。

・新人看護師の育成や中間看護師の育成のメンタリングに活かせます。

・新人看護師さんへの関わり方に活かせそうです。

・新人教育に辺り、自分を見つめ直す機会となった。相互作用を意識して関わっていきたいと思う。

・自施設の研修で、実地指導者に伝えていこうと思います。新人を、部署で育てていく取り組みに活かせると思いました。

・これからの新人や後輩への指導に活用できると思う。

・施設の実習、実地指導者研修に伝えていきたいと思います。

・周辺参加理論について、実践を交えわかりやすく講義してくださり、ありがとうございました。技術習得だけではない部分をどのように伝えるかを模索していたので、腑に落ちる内容で院内の研修や、実地指導者に伝えていきたいと思います。

（第２回）

・現在新人担当を担っているので、全て実践に活かせる内容でした。

・新人やスタッフに興味を持って学んでもらえるようなしくみや関わり方を学べたので、勉強会の予定など新人と一緒にプランニングしようと思います。

・教育計画方法の見直し、次年度の教育計画に役立ちます。

・職員全員に活かせそうです。

・自分の研究に、役立てていこうと思いました。

・スタッフのキャリア支援、プログラム作成等に役立てていきたいです。

・教育プログラムに活用させていただきます。

・改めて、面談、目標設定、評価、面談の徹底をし、モチベーションを高める支援、環境作りを行わなければならないと考えます。

・計画立案、病院の学習計画立案時、教育係との相談時に役立つと思いました。

・学習者が何を学びたいか、相互作用を意識していきたい。

（第３回）

・臨床判断能力の育成の評価に活かせるし、今後の実習指導者、実地指導者への臨床判断能力の育成にも役立てていきたい。

・新人を評価するとき、また自分自身を評価する上で活用したい。

・臨床判断モデルの流れに沿って思考することを指導者の育成に活用する。

・ラダーの評価や病棟での評価に活かせられたらと考えます。
・すでに臨床判断モデルを、新人教育委員会や高齢者看護委員会、主任会で教育し、実際の看護記録を使って事例検討しています。
・理論を通して新人看護師や学生に携わり支援をしていける。
・指導者の立場でルーブリックは段階もあるので新人、中堅など様々な年代に分かりやすく指導できる。
・新人の評価でどこができているのか分析でき、伝えることができる。
・院内の教育委員会にとりいれていきたい。
・これから臨床判断能力を身につけようとしている新人看護師や学生さんへのどう指導していくか、道標になりました。
・事例があり、何が気づきで、解釈で反応、省察なのか分かりやすかった。
・もう少しモデル理解する時間がほしい、活用事例を紹介してほしかった。
・ペアシェアで、考えることができて良かった。

３．今後の展望

受講後のアンケートでは、3 回の開催に共通し、現場での教育に早速取り入れていきたい、活用できそうという意見が多くあり、理論的背景を基盤とした具体的な教育実践方法を考える良い機会となっている。次年度の開催を希望する意見も多く、今の学生に対する看護教育、離職防止のための教育、継続教育のコツというテーマを取り上げて欲しいという意見があったので、受講者のニーズに合わせ内容を検討しつつ今後も開催を継続していきたい。

昨年度に引き続き、取り入れたペアシェアでは、他病院の方と実際に看護実践を語ることができ考えを聞く機会になった、楽しかった等の意見があり、今後もペアシェアを取り入れていくことで、普段は接することが少ない他施設の方との情報共有の機会としても活用してもらえればと考える。今年度から取り入れたコメントスクリーンの使用については、意見が出しやすくて良かったという意見もあり、来年度も使用を検討していきたい。

昨年度と同様に今年度も月に１回の開催とし、開催時期についての意見はなく、昨年度同様に連続して受講される方の勤務調整も考慮し、今後も開催については月に１度で継続していきたい。開催時間については、勤務時間外（おそらく夕方以降）が良いという希望が数件あったため、可能な範囲で開催時間について調整していきたい。

今年度は、対象者を大阪府内の医療施設に所属する方としていたが、看護教育継続実践講座のリーフレットを近畿圏内の医療施設へ配布することが可能となったので、来年度は対象者の範囲を拡大して開催できるよう準備を進めていこうと考えている。

精神医療を支える看護職に向けたオンラインセミナーの企画・運営

（精神行動ケア科学）河野あゆみ　松田光信　冨川順子　奥野裕子　柱谷久美子

1.　活動の目的

本活動の目的は、大阪府内の精神医療を支える看護職者に向けて、オンラインで行う精神看護のセミナー（以下、精神看護オンラインセミナー）を定期的に開催することによって、看護職者の看護生涯学習を支援すると共に精神看護の質的向上に寄与することである。

申請者らは、昨年度より精神看護学を専門とする本研究科教員（以下、精神看護学教員）による活動チームを組織し、実習施設や社会人大学院生が勤務する施設の看護職を対象にした精神看護オンライン研修会を企画・運営してきた。その事後アンケートによれば、殆どの参加者が自身の実践に役立つ、新人看護師や精神科経験のない看護師にとって質の高い看護について考える機会になる、自身の役割について理解を深める機会になる等、肯定的な回答をした。

そこで、今年度からは対象範囲を大阪府内における精神科病棟を有する医療施設と精神科訪問看護ステーションの看護師及び大学院生へと拡大し、精神看護学教員の教育研究に係る活動と成果を広く発信することにより、対象者の大学院進学意欲を高め受験生の獲得にも波及させることを目指し、活動を開始した。

2.　活動方法

１）対象者：大阪府内に設置された精神科病棟を有する医療施設又は、精神科訪問看護基本療養費、精神科複数回訪問加算、精神科重症患者支援管理連携加算の届け出受理を受けている訪問看護ステーションの看護師と、本研究科において精神看護学を学ぶ大学院生とした。なお、病院および訪問看護ステーションの選定には、厚生労働省・地方厚生局の公表情報を参照した（対象病院数 51、対象訪問看護ステーション数 910、計 961 施設）。広報の方法は、対象施設の看護部長又は管理者宛にセミナーへの案内文を郵送した。

２）セミナーの形式：ZOOM を活用して行う双方向型のセミナーとした。セミナーは 1 回あたり 90 分で構成し、講義又は演習と質疑応答で構成した。講師は申請者らが担い、セミナー資料は PDF 化し、毎回のセミナー開催中に ZOOM のチャット機能を用いて配信した。

３）各回の内容：以下表のとおり行った。

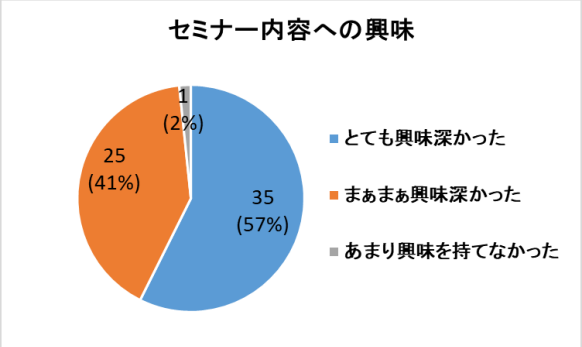
回	開催月	テーマ	講師
第 1 回	9 月	統合失調症をもつ当事者に対する心理教育の基本	松田
第 2 回	12 月	発達障がい児・者へのケアの工夫	奥野
第 3 回	2 月	精神科における身体合併症への看護	柱谷
第 4 回	4 月	当事者のニーズにこたえる精神科訪問看護（開催予定）	河野

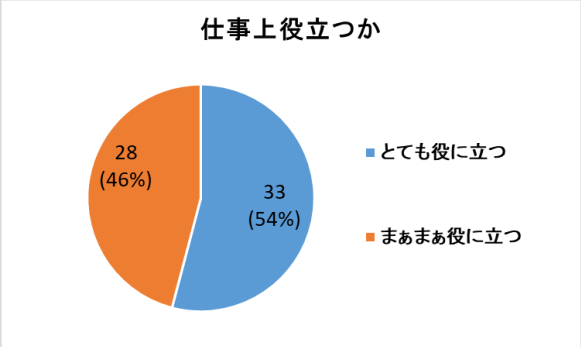
3.　参加者の概要と参加者アンケート

1）第１回「統合失調症をもつ当事者に対する心理教育の基本」

① 参加者の概要：参加者数 80 名（うち 13 名は病院所属、41 名は訪問看護ステーション或いはクリニック所属、他は不明者）

② アンケート：回答者数 61 名（回収率 76.3%）





＜自由記載（一部抜粋）＞

◆　感想や学び

- 大変わかりやすいものでした。今後の看護に活かしたいと思います。
- いつか精神看護の分野で勤めたいと思っているため、とても勉強になりました。
- 精神専門の訪看ではないのであまり馴染みがない部分もあり、勉強になりました。
- 患者様との関わり方や考え方も理解できて、心理教育の重要性が理解できました。
- 精神科患者だけでなく、日々のコミュニケーションに役立つと思いました。
- 訪問看護での患者様との関わりに、心理教育を取り入れていきたいです。
- 心理教育についての考え方から学びなおすことができました。本人の体験や感じ方にフォーカスをあてていくことが必要と感じました。
- 体験と情報をつなぎ、患者様自身の症状が客観的に感じられるような関わりの姿勢が学べました。
- ぜひ、この研究を統合失調症以外にも広げていただき、対話の重要性や当事者性と当事者の方の主体的な参加が重要であることを証明していただきたいと思いました。
- 正のフィードバックは年齢疾患問わず有効な精神的サポートだと感じました。その他にも患者なりの受容の仕方を支援するという考え方も患者自身を尊重した考えであることが自他共に感じることであるな，と思いました。そのようなことが「共に考える姿勢」というものなのだと改めて考えさせられた内容でありました。
- 精神科の研修を受ける機会が少なかったが、今回のように実際に患者様や利用者様に実

践できるようなケア方法を学べてより精神科看護に興味が沸きました。

◆ 要望

・ もう少し短くてもいいと思いました

・ 開催日ですが、月曜日以外の方が参加しやすいので今後検討いただければ幸いです。

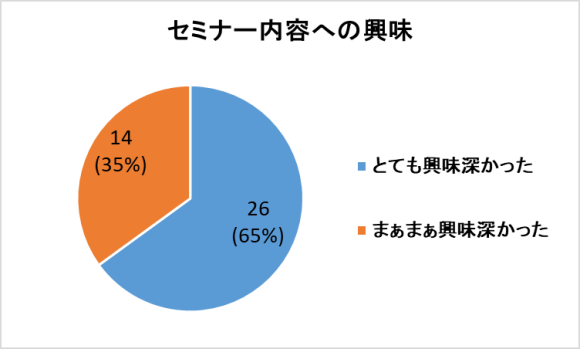
・ 会話が困難な統合失調症の看護についての対応を知りたいです。

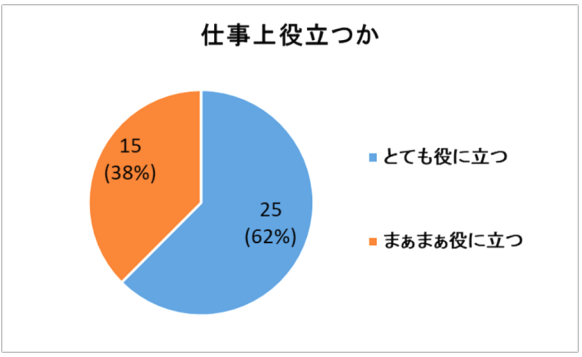
・ 訪問看護師として活用する方法として、もう少し具体的にご指導頂きたいです。そしてこのプログラムをどんどん広めて頂き在宅生活を支える私たち訪問看護師に伝えていって欲しいと思いました。

2） 第 2 回「発達障がい児・者へのケアの工夫」

① 参加者の概要：参加者数 56 名（うち 13 名は病院所属、21 名は訪問看護ステーション、他は不明者）

② アンケート：回答者数 40 名（回収率 82.1%）





＜自由記載（一部抜粋）＞

◆ 感想や学び

・ 本人だけでなく、家族への関わりも重要だということが分かりました。

・ 発達障害児のケアの工夫を学ぶところで、まず発達障害についての理解を深めるために症状等を説明して頂けたため、ケアの根拠が分かりやすく良かったです。レジメも分かりやすかったです。

・ 児童心理治療施設で勤務しております。子どもの発達特性に応じた対応、今現在取り組んでいる援助方針と照らし合わせることができ、大変勉強になりました。

・ 精神科訪問看護に従事しています。精神障害のある親御さん、神経発達症のある子供さんの家族に関わる機会が多くあり本日の研修内容を参考に支援していきたいと思います。

・ 就労事業所につとめており、利用者さんの中には発達障害の方もいるため、興味があり研修を受けさせて頂きました。伝え方について今後役立てていきたいと思います。
・ 参考文献を引用しながら実際に合ったケースを説明して頂いていて分かりやすかったです。
・ 発達障害の子どもについての研究をしています。とても参考になりました。
・ 長期入院中の発達障害や知的障害がベースにある統合失調症患者さんの中には、衝動性のコントロールが難しく、行動性制限を行うケースがあります。最近、院内学会で、そういった患者さんにペアレントトレーニングを基本にした関わりを行ったところ、衝動性のコントロールができるようになり、本人が希望する生活に一歩近づいた、という発表がありました。ある一定年齢以上の患者さんは、発達障害へのサポートを受けずに大人になっており、その方々への支援方法の一つとして、ペアレントトレーニングが有効ではないかと考えています。

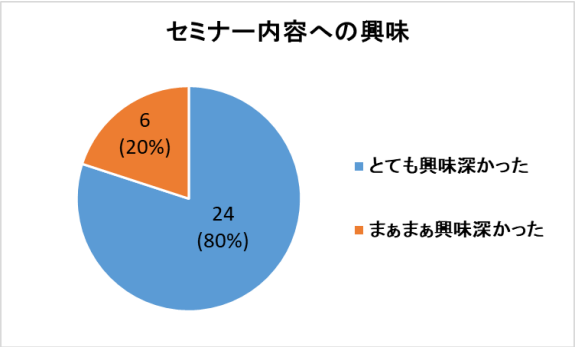
◆ 要望

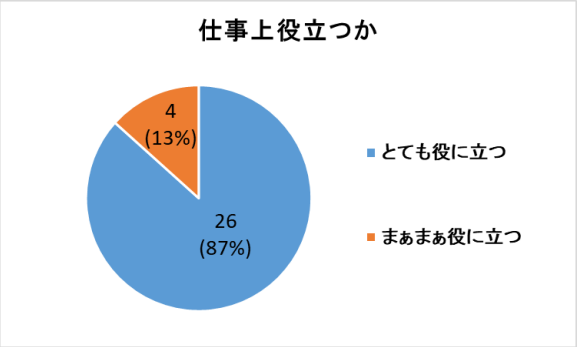
・ 途中途切れてしまったので再度視聴したいです、資料も欲しいです。トレーニングにも参加したいです。
・ 事前に資料を頂けるとなお理解が深められると感じました。
・ 発達障害の子供に関わっていると両親も同じように発達障害かなと感じることが多く、難しいなと思います。今後両親への関りについても教えていただけるとありがたいです。
・ 大人の発達障害や支援について研修があれば、受けたいです。

3） 第3回「精神科における身体合併症への看護」

① 参加者の概要：参加者数47名（うち16名は病院所属、11名は訪問看護ステーション所属、他は不明者）

② アンケート：回答者数30名（回収率63.8%）





＜自由記載（一部抜粋）＞

◆ 感想や学び

・ スライドも説明もわかりやすく、今後のフィジカルアセスメントに活用しやすくてよかったです。

・ 精神科の患者に沿った特徴をおさえられていてわかりやすかったです。

・ QT 延長について理解が深まりました。心電図について再度復習しようと思います。

・ もっと他の身体症状の観察やアセスメントについても、振り返り、勉強したいと思いました。

・ いつもと表現が違って、身体に関して言っている場合、「何かいつもと違うぞ」と思ってバイタル測定することの大切さを学びました。いつもと違うがわかるためには、「いつもはどうであるか」を把握しておく必要があるので、利用者さんと信頼関係を築きながら身体変化もないか観察していきたいです。

・ 精神疾患を持つ方は身体的な苦痛を言葉で表出することが苦手な方が多いので、普段の利用者さんの言動に注意して、いつもとは違う幻聴や妄想の内容でれば身体的苦痛が隠れていないか気にかけていきたいと思いました。

・ 自分では解っていてもそれを後輩に伝え、チームで看護していくことが大切で重要です。情報共有をしっかり行い患者一人ひとりにあったケアが行えるように教育を（しようと）思いました。

◆ 要望

・ 精神疾患患者の身体症状の対処方法を知りたかったです。

・ お昼の時間帯のため、参加が難しい時があります。オンデマンド配信などもご検討いただけると嬉しいです。

・ 私もタブレットの機能上なのか。呼吸音が聞けなくて残念でした。

4.　今後の課題と展望

多くの参加者が、自身の実践に活用できる有用な学びを得ていた。参加者の傾向としては、訪問看護ステーション所属の者が大多数を占め、精神科看護を専門としていない者もみられたことから、精神疾患患者への看護実践や研究に関する興味・関心や理解を深めるよい機会になったと考える。今後も参加者のニーズに応じたテーマを設定し、このような活動を継続していきたいと考えている。また、開催時期や曜日、時間について、より対象者が参加しやすい日時を設定する必要がある。さらに、資料配信の方法や、オンデマンド配信についても今後の検討課題としたい。

ハイブリッド形式による
集中治療に携わる看護師のためのクリティカルケア看護実践講座

北村愛子　佐竹陽子　井上奈々

Ⅰ．活動目的

クリティカルケア領域は、感染症や一般病棟からの重症患者を対象とすることも多く、様々な問題を抱える患者・家族に対して、複雑な治療とケアを集学的に実践し解決に導く重要な役割を担い、ポストコロナの現在も必要性が再認されている。クリティカルケア領域で直面する倫理的課題について、高い倫理観のもと包括的に捉え解決に導くことは看護の重要な役割であり、臨床看護師への十分な教育が必要である。

今回は、クリティカルケア領域において倫理的配慮を必要とする患者・家族への看護実践の質向上をめざして、看護理論・研究を実践や教育に活用して臨床を変革していくプロセスについて学習する機会を企画した。また事例検討やワークショップを通し、参加者個々が課題解決への糸口をつかむことができるようなプログラムとした。本講座の開催で、昨今のより複雑化したクリティカルケア領域の倫理的課題に対し、チームで変革したいと考える看護師の育成に寄与することを活動目的とした。

Ⅱ．プロジェクト活動概要

１．対象者

集中治療専門医研修施設（西日本）・150 床以上の内科系 外科系 DPC 対象病院に案内（右）を送付し、クリティカルケア部門および病棟部門で重症患者の看護実践にかかわる看護師経験３年以上の看護師を募集した（100 名）。

２．講座形式

対面・オンラインのハイブリッド形式

３．講師

北村愛子　佐竹陽子　井上奈々

急性・重症患者看護専門看護師（CCNS）９名

第７回クリティカルケア看護実践講座　案内

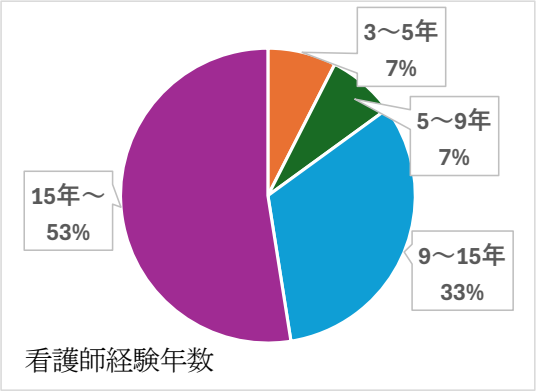
4．資料

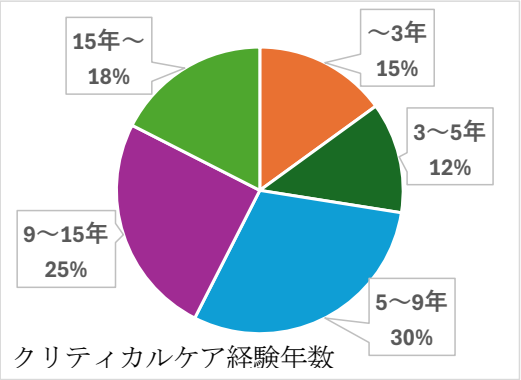
本学教員が作成したテキスト(全 39 ページ)を当日の学習教材として使用した。

5．活動内容

1）参加申込者（40 名）の概要

所属部署　ICU：15 名　HCU：11 名　救急：3 名　その他：11 名





2）タイムスケジュール

午前の部　2024 年 12 月 23 日（月）9：30～12：30

「クリティカルケア領域の倫理的配慮に活かす看護理論と実践」

時間	内容	講師
9：30～10：30	講義 倫理的配慮を必要とする患者と家族への支援に必要な理論 ・危機理論／ストレスコーピング理論 ・悲嘆ケアと実践への活用	北村愛子
10：30～11：15	講義 家族の危機	井上奈々
11：30～12：30	演習　事例検討 ・悲嘆ケア／意思決定支援	佐竹陽子 CCNS (ファシリテーター)

午後の部　2024 年 12 月 23 日（月）13：30～16：30

「クリティカルケア領域で行う看護研究と実践への活用」

時間	内容	講師
13：30～14：50	講義 看護研究成果と実践への活用	小磯崇司 森田幸子
15：00～16：00	ワークショップ 実践に活かす！研究について考えてみよう	佐竹陽子 CCNS (ファシリテーター)

３）内容

(1) 講義：クリティカルケア領域の倫理的配慮に活かす看護理論と実践

クリティカルケア領域において倫理的配慮を必要とする患者や家族の特徴やその背景、倫理原則について概説した。倫理的配慮を必要とする患者と家族への支援に必要な理論として、「危機理論」「ストレスコーピング理論」を解説した。さらに看護理論を活かした実践として「悲嘆ケア」に焦点をあて、倫理カンファレンスのもちかたや患者やその家族への具体的な介入方法について解説した。

(2) 講義：家族の危機

クリティカルケア領域における家族の危機に焦点をあて、システムとしての家族の捉え方と看護の必要性について解説した。家族へのかかわりの実際では、家族危機モデルや家族ニードのアセスメントツールの活用や、必要なコミュニケーションの具体的な技法を解説した。

(3) 演習：事例検討　集中治療期から終末期に移行する患者・家族への倫理的配慮

作成した仮想事例（手術後、全身状態の悪化をみとめ集中治療室に入室し終末期に移行した患者）をもとに「倫理カンファレンスを開催する」グループワークを行った。討議は、急性・重症患者看護専門看護師のファシリテートのもと、患者と家族に必要と考える倫理的配慮を自由に語り合うことからはじめ、状況の分析、具体的な意思決定支援と悲嘆ケアの検討と段階的に進めた。グループごとの討議の後、全体での共有を行った。

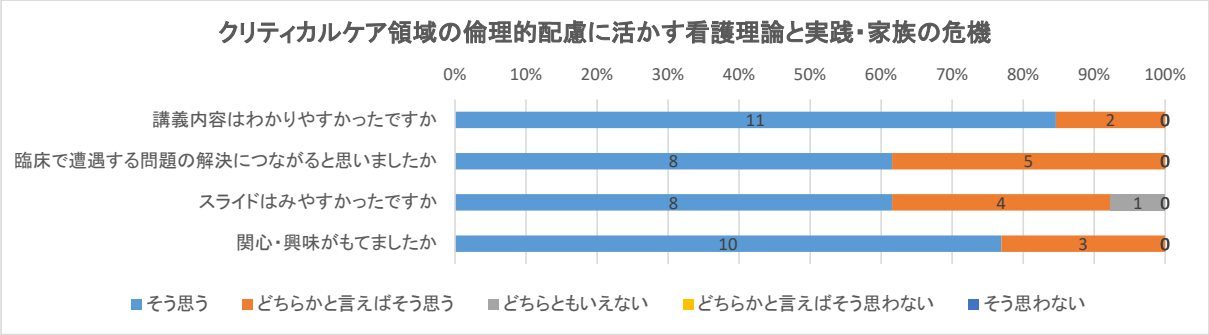
(4) 講義：看護研究成果と実践への活用

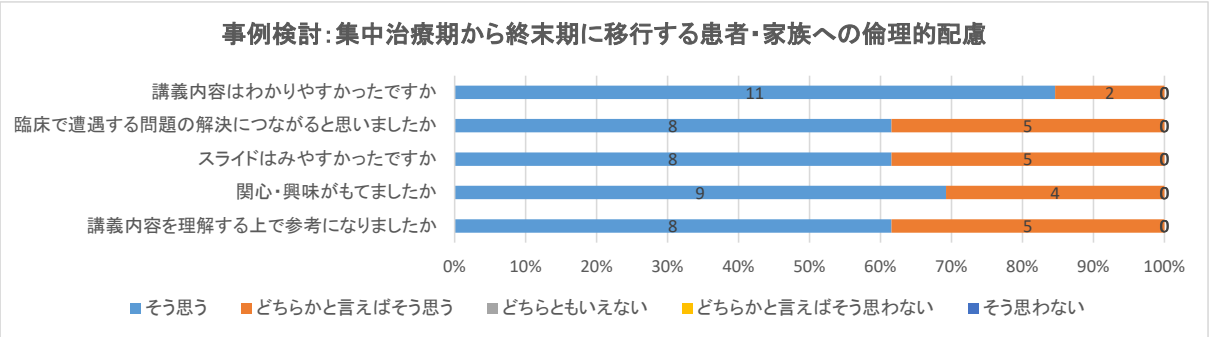
クリティカルケア領域で行う看護研究と研究成果の実践への活用について、急性・重症患者看護専門看護師が臨床での実例を示しながら解説した。

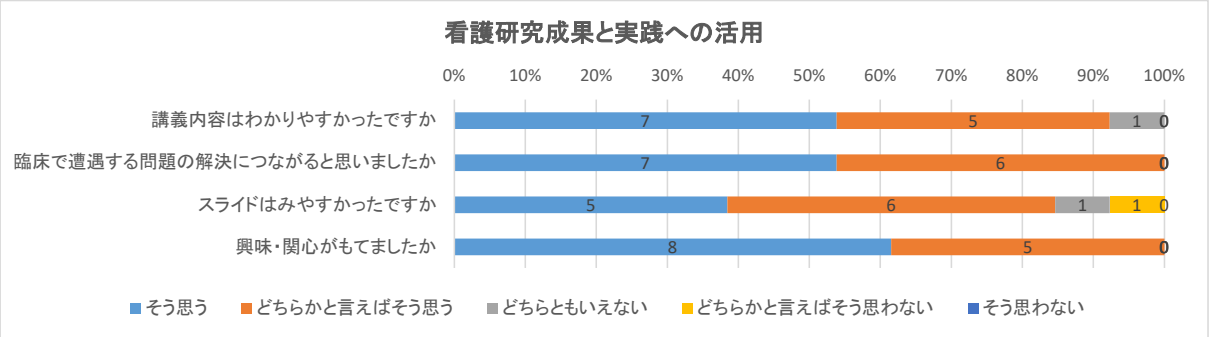
(5) ワークショップ：実践に活かす！研究について考えてみよう

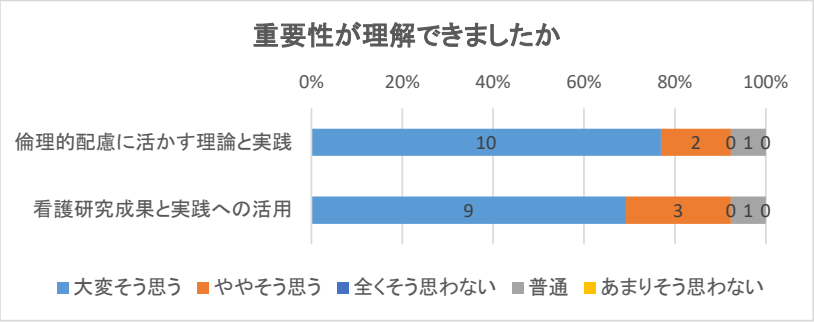
クリティカルケア領域における臨床での看護研究について、臨床で看護研究をする意義、研究テーマの考え方を解説した。急性・重症患者看護専門看護師のファシリテートのもと、参加者同士で臨床での研究疑問を出し合いながら、それぞれが研究課題につなげていくための思考を整理した。

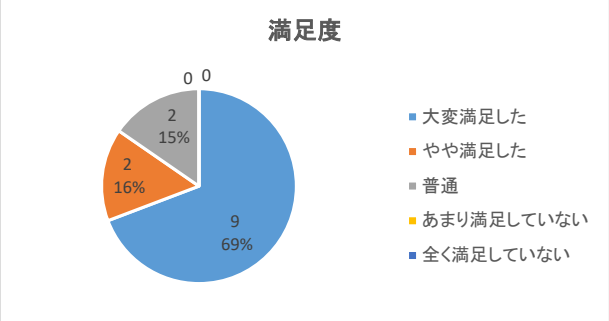
6．アンケート結果（回答 13 名/参加者 28 名）











自由記載（一部抜粋）

ワークショップ「実践に活かす！研究について考えてみよう」について

“他病院の方との意見交換ができて良かったです”

“自分にとって良い看護実践を考えること、日々の看護実践場面から疑問に思うことなどからクリニカルクエスチョンが生まれるのだと知った。今まで研究テーマなんてわからない、と思っていたが、種はたくさあることに気づいた。”

内容について

“何度も使用している理論ですが先生の知見を踏まえた講義を聴かせていただきより理解が深まりました。”

“とても勉強になり、今後の臨床に活かすことができると思います。ディスカッションでも、各参加者の考えが聞け、新たな視点を学ぶことができました。またファシリテーターの方にも上手く誘導していただき、楽しく参加させていただけました。”

“とても内容の濃い講義で、これからの看護実践に活かしていきたいと思った。事例検討やワークショップも、普段関わることのない他施設の看護師さんのお話が聞けてとてもよい刺激になりました。”

運営について

“体験程度だったので仕方ないかもしれませんが、グループディスカッションの時間が短く中途半端な話のまま進むのでモヤッとしました。”

“今後もオンラインでの開催も継続いただきたいです。”

“開催日は休日ですとありがたいです。”

“午前の部と午後の部は別日でそれぞれ１日使って聴いたり考えたい内容でした。”

Ⅲ．総括

クリティカルケア領域では、急性疾患による重症患者だけでなく、一般病棟からの重症患者を対象とすることも多く、臨床看護師は、ベッドサイドで様々な倫理的課題に直面する。クリティカルケア領域に特徴的な倫理的課題に関心をもち、高い倫理観と倫理原則のもと解決に導くことの重要性とその看護実践について解説したことは、参加者の学習ニーズにも合致しており、臨床現場での看護実践の一助となったと考えられる。

また、クリティカルケア領域の重症患者は、その重症度や緊急性から患者本人とコミュニケーションをとることが困難な状況も多い。本講座で、倫理的配慮を必要とする患者と家族への支援に必要な理論に対する理解を深め、理論に基づいたケアについて解説したことは、臨床で遭遇する問題の解決につながるとの意見が多くあったことからも、臨床看護師が重症患者へのケアの在り方を検討する際の有益な内容であったと評価できる。

仮想事例をもとに、「倫理カンファレンスを開催する」という臨床での看護実践に適応させながら行った事例検討では、これまでの終末期患者家族へのケアの振り返りや、日々実践しているケアの意味づけにもつながることで、さらなる看護実践能力の向上に働きかけることができたと考える。また面識のない参加者同士での対面もしくはオンラインで行うディスカッションではあったが、急性・重症患者看護専門看護師のファシリテートを活用することで、各グループで活発な意見交換ができた。参加者からは“新たな視点を学ぶことができた”“よい刺激になった”という感想もあり、ディスカッションを通して参加者の交流を図ることも、本講座の重要な役割であることを再確認した。

今回は新たな試みとして、看護研究と実践への活用について講義とワークショップを行った。参加者の関心も高く、臨床で遭遇する問題解決への糸口として看護研究を活用することや、自身が臨床で看護研究を行う意義について考える機会につながったと評価している。

今年度も例年と同じく救急・ICU・HCU だけでなく病棟からの参加者もあった。今後も、高度侵襲を伴う集中治療期のほか、病棟で周術期にある患者にかかわる看護師にも、より倫理的課題に関心をよせてもらえるような企画を継続していきたいと考えている。また今回は、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催した。ハイブリッド形式での開催は、参加者それぞれのニーズに柔軟に対応できたと評価できる一方で、対面とオンライン両方の参加者の状況を把握しながら運営する必要があり、講義内容と時間配分、ディスカッション方法についてなど、運営上の課題も明確となった。今後は、講座で取り扱う内容に応じて運営方法も工夫しながら企画していきたいと考えている。

活動後記

今年で７回目となるクリティカルケア看護実践講座ですが、講座を通してクリティカルケアに携わる看護師の皆さまの明日からの臨床実践に活用できる基礎的な知識と看護の技術を提供することができたと考えております。患者様やそのご家族へのケアに尽力されながら、本講座にご参加いただきましたことに心より感謝申し上げます。参加者の皆様を通じて、患者様とそのご家族によりよいクリティカルケア看護を届けることができますよう、今後も活動を続けていきたいと思います。（北村愛子、佐竹陽子、井上奈々）

未来を拓く！基礎から学ぶ看護研究セミナー（基礎編・継続編）

大阪公立大学大学院看護学研究科先進ケア科学領域ヒューマンケア科学分野
細名 水生，森木 ゆう子，冨澤 理恵，重見 雅子，椋木 実希

Ⅰ．活動目的

大阪府内に在住または府内の医療・保健・福祉施設に所属する看護師に対して、看護研究セミナー「未来を拓く！基礎から学ぶ看護研究セミナー」を開催し、看護師の研究能力の向上を図る。これにより、所属施設及び活動の場において、研究活動を推進し看護実践能力や看護の質の向上につながり対象者への看護に還元できると考える。

Ⅱ．活動内容

〇基礎編

１．参加者：医療・保健・介護・福祉施設に所属する看護師　定員 10 名

２．場所：大阪公立大学大学院看護学研究科（阿倍野キャンパス看護学舎）

３．実施内容

研究初心者や研究の経験が少ない看護師の参加を歓迎する。本学看護学研究科の教員による講義及び演習を行う。大阪府内の看護師であれば看護研究の経験は問わず、所属に関わらず実践に活かすことができる看護研究の概要と活用の手立てになる内容とする。

講義を受けるだけでなく、実際に参加者は、本セミナーの受講とともに、自分の研究テーマで、文献検討から研究計画書作成まで取り組んでいく。

４．募集方法

本学のホームページへの掲載、大阪府内 100 床以上の医療機関 200 施設にチラシを配布した。

５．参加費：セミナー3 回シリーズで 3,000 円とした。

〇継続編

１．参加者：2022 年度、2023 年度の本セミナー受講者
　　定員 10 名

２．場所：大阪公立大学大学院看護学研究科
　（阿倍野キャンパス看護学舎）

３．実施内容

実際の研究への取り組みにおける基礎編の受講内容を踏まえた発展させた内容とし、講義と演習で構成した。

４．募集方法

2022 年度、2023 年度の本セミナー参加者へメールで案内をして募集した。

５．参加費：セミナー3 回シリーズで 2,000 円とした。

図 1 セミナーチラシ

Ⅲ．活動の実施報告

〇基礎編

3 回のセミナーの参加者は、看護師 10 名（9 施設）であった。

1．第 1 回セミナー

1）開催日時：2024 年 10 月 18 日（金）　10：00～16：00

2）場所：阿倍野キャンパス看護学舎 5 階多目的ホール、4 階 LL 教室　3）参加者：10 名

4）プログラム

10：00～12：00	講義「看護研究の概要と進め方」講師：細名 臨床看護研究の概要、文献検索の方法、リサーチクエスチョンの整理
13：00～16：00	PC を用いた医中誌での文献検索演習

図 2 基礎編第 1 回の会場の様子

2．第 2 回セミナー

1）開催日時：2024 年 11 月 8 日（金）　10：00～16：00

2）場所：阿倍野キャンパス看護学舎 5 階多目的ホール　3）参加者：10 名

4）プログラム

10：00～12：00	講義「研究計画からの研究のプロセス」講師：細名 研究計画書の作成から研究実施から研究成果の公表までの一連のプロセス
13：00～16：00	演習「研究計画書を作成する」自分の研究計画書の作成

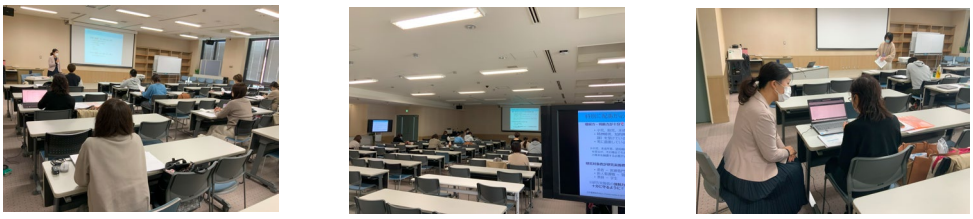


図 3 基礎編第 2 回の会場の様子

3．第 3 回セミナー

1）開催日時：2024 年 12 月 6 日（金）　10：00～16：00

2）開催場所：阿倍野キャンパス看護学舎 5 階多目的ホール　3）参加者：10 名

4）プログラム

10：00～12：00	演習「研究計画書の修正」研究計画書の確認と個人指導を実施した。
13：00～16：00	研究計画書の発表(1 人 15 分)及びディスカッション（参加者及び教員）

図 4 基礎編第 3 回の会場の様子

〇継続編

3 回のセミナーの参加者は、看護師 2 名（2 施設）であった。

1．第 1 回セミナー

1）開催日時：2024 年 9 月 20 日（金）　10：00～16：00

2）場所：阿倍野キャンパス看護学舎 5 階多目的ホール　3）参加者：2 名

4）プログラム

10：00～12：00	講義「研究デザインの選択とクリティーク」講師：細名
13：00～16：00	演習「論文クリティークの実際」論文クリティークの演習

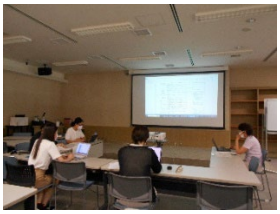
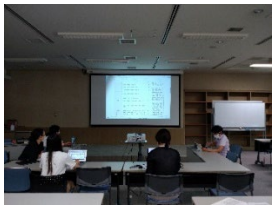



図 5 継続編第 1 回の会場の様子

2．第 2 回セミナー

1）開催日時：2024 年 11 月 12 日（火）　10：00～16：00

2）場所：阿倍野キャンパス看護学舎 5 階多目的ホール　3）参加者：1 名

4）プログラム

10：00～12：00	講義「データ分析の手法」講師：細名
13：00～16：00	演習「データ分析を実施する」模擬データからの分析と意見交換

3．第 3 回セミナー

1）開催日時：2024 年 12 月 9 日（月）　10：00～16：00

2）開催場所：阿倍野キャンパス看護学舎 5 階多目的ホール　3）参加者：2 名

4）プログラム

10：00～12：00	講義「研究成果の公表のプロセス」講師：細名
13：00～16：00	演習「研究成果の発表の体験」自分の研究成果の発表と意見交換

図 6 継続編第 3 回の会場の様子

Ⅳ．アンケートの集計結果

１．参加者の背景

○基礎編（表 1）

表 1　基礎編の参加者の背景

1）年齢：30 歳代 3 名、40 歳代 3 名、50 歳代 4 名　　2）最終学歴：専門学校 10 名
3）取得免許：看護師 10 名　　4）看護職としての経験年数：平均約 18.63 年
5）看護職として所属したことがある施設：病院（病棟）10 名、病院（外来）1 名、診療所 1 名
6）看護研究に取り組んだ経験：あり 8 名（学生時代 1 名、就職後 8 名）
7）看護研究を学んだ経験：あり 7 名（学生時代授業 2 名、就職後自己学習 5 名、就職後研修受講 4 名）
8）セミナーに参加した理由（一部抜粋）
・職場で看護研究を進めていますが、参加者のほとんどが研究の経験がなく進め方が分からない状態なので、代表で今回参加しました。
・院内の看護研究委員会に所属しており、基礎から学びたいと思ったので参加させて頂きました。
・常々疑問に思っていたが、追求せずに管理職となってしまった。スタッフへ指導していく立場となり、改めて学び直し、疑問であったことを明らかにしていきたいと思ったため。

○継続編（表 2）

表 2　継続編の参加者の背景

1）年齢：30 歳代 1 名、50 歳代 1 名　　2）最終学歴：専門学校 2 名　　3）取得免許：看護師 2 名
4）看護職としての経験年数：平均 20.25 年
5）看護職として所属したことがある施設：病院（病棟）1 名、病院（外来）1 名
6）看護研究に取り組んだ経験：あり 2 名（就職後 2 名）
7）前回のセミナー以外で看護研究を学んだ経験：あり 2 名（就職後自己学習 2 名、就職後研修受講 2 名）
8）セミナーに参加した理由（一部抜粋）
・学会の査読委員に任命されたため
・自己学習では足りない所を学び直したかった為
・JSEPTIC や看護協会の看護研究セミナーを受講したりしましたが、もう少し奥深く学びたかった為

２.セミナーへの参加について

（1） 満足度について（図 7，図 8，表 3，表 4）

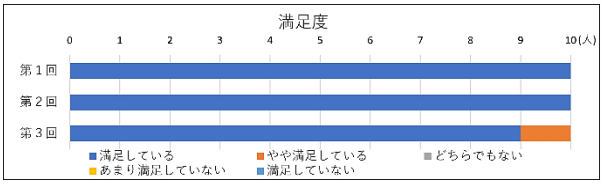


図 7 基礎編各回のセミナー満足度

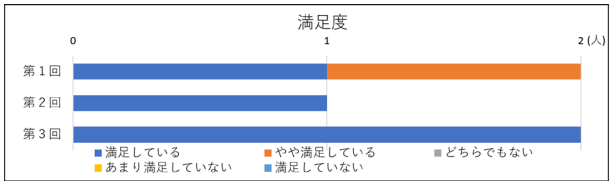


図 8 継続編各回のセミナー満足度

表 3 基礎編満足度理由（一部抜粋）

第1回
・看護研究のテーマ、どんな文献を調べたら良いか等が少し明確にすることができた。
・研究の流れ、自分の考えで足りていない部分が分かりました。
・演習（文献検索）が参考になりました。少し頭の中を整理しながら、検索する必要があることを学びました。
・医中誌web、当院にも導入されているが、使用することがなかった。チューターさんにケンサク方法など詳しく教えていただいた上に、文献も準備していただけるなどフォローもしていただき、参加して良かった。自部署で指導の際も、このくらいのフォローをすることでスタッフの不安など取り除けるのではと思った。

第2回 ・他の参加者の考えていることや悩みが聞けること ・複数回セミナーを開催してもらえることで、前回からの疑問点の解消につながりました。 ・少人数で尚且つ1対1の指導がうけれる ・研究計画書の記載方法や内容について詳しく学んだことが無かったので、とても勉強になりました。また、論文についても学べて良かった。特に計画書を実際に記載しながら、先生たちに質問を出来たりしたので、日頃自分で書くより、はるかに書きやすかったです
第3回 ・たくさんの意見を頂けたことや他の方の研究を知ること、意見を言っても受け止めてもらえる場が有りとても良かったです ・意見交換できて、楽しく学ぶ事ができました ・色んな人の計画書を見ることで、研究に関わらず色んなアイデアを持つことができた ・看護研究テーマが見えました！！他の人の研究テーマを聞くのがおもしろかったです。

表 4 継続編満足度理由（一部抜粋）

第1回 ・クリティークを初めて施行したのでどのような点を確認されるのか知れて良かったです。 ・理解は出来たが、まだまだ自分自身の知識が浅い為、一度学んだだけでは身に付かない為、学習を続けていかなければならないと感じました。クリティークを行う習慣を身に付けたいです。
第2回 ・分析手法について、使用するソフトについて等紹介して頂いたのが良かったです
第3回 ・統計について学びたくても、いつも単発で調べるのみだったので参加させて頂いて良かったです。

（2）理解度について（図 9，図 10，表 5，表 6）

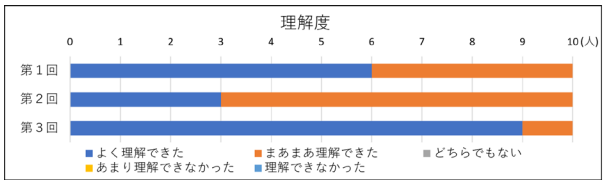


図 9 基礎編各回のセミナー理解度

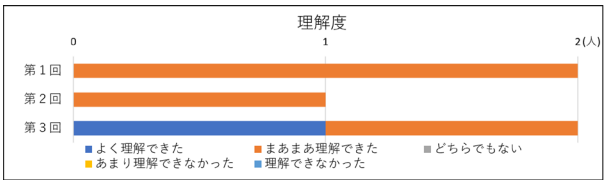


図 10 継続編各回のセミナー理解度

表 5 基礎編理解度理由（一部抜粋）

第1回 ・いろいろ考えていたことがあり、不安でしたが、相談させて頂いて、少し安心しました。 ・講義内容がわかりやすかったです。 ・研究の流れが分かりやすかったです。 ・まだしっかりと触れていないので、もう一度自分でしっかり触ってみたい。また看護研究全体を見た時に研究計画書の時点で半分終わっていることに驚いた。計画書は適当にやってしまうことが多かった。スケジュールそのものを見直すことを考えないといけないと思った。
第2回 ・研究計画書立案に少し自信がないから ・アンケートの作成に不安があるから ・統計など理解が難しいところもありましたが、よく理解することができました。 ・今後の進め方を理解できた。倫理的配慮のことなど理解できた。
第3回 ・今回のセミナーを受けたことで研究を行うまでの過程の大事さを理解できました。調査方法もテーマも悩みが多かったですが、ディスカッションで明確になったと思います。 ・少し迷うところがでましたが、他者からの意見が参考になりました。 ・研究計画書に沢山指導していただいて、どこをどうしたらいいのかとても分かりやすかったです。また他の人の計画書をみて、とても参考になりました。

表 6 継続編理解度理由（一部抜粋）

第1回 ・初めて聞く言葉も沢山あり、難しい所もありましたが、分かり易くて楽しかったです。 ・先生方からの助言により理解出来ました。知らない用語が沢山あるので、もう少し深く学習する必要性を感じました。
第2回 ・興味があるので楽しい反面、難しく理解が追い付かない部分は少し焦りました。

第3回 ・統計はやはり難しいと感じました。

（3）難易度について（図 11，図 12）

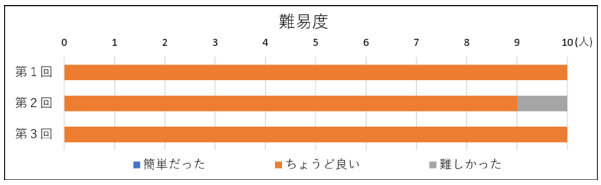


図 11 基礎編各回のセミナー難易度

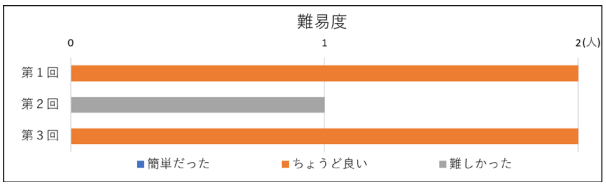


図 12 継続編各回のセミナー難易度

（4）セミナーに参加して良かった点（表 7，表 8）

表 7 基礎編セミナーに参加して良かった点（一部抜粋）

第１回 ・基礎から学べたので難易度があっていたので理解を深めることが出来た。 ・実際に色々な文献にふれることができた。 ・”研究とは”という本は何冊か見たがテーマの決め方など具体的なやり方を知ることができた。テーマを決めることにもっと時間をとっても良いのかなと思った。 ・実際に文献検索など行えて、その場で質問できる
第２回 ・看護研究について、自分で行う方法を身につけることができました。 ・医中誌の文献検索ができる ・資料の郵送 ・自分で取り組んできたことが研究として振り返る機会となった。現場での疑問などを研究に出来るのではと考えられるきっかけとなった点が良かった ・すぐに質問できる。
第３回 ・ディスカッションで意見交換できたところ。 ・自分の計画書の改善点などを個別に教えてもらえた。分からないことや不安な所をすぐに聞けたので、今までより計画書が作成しやすかった。 ・研究をしないと、しないとという思いだけで、数年たっていました。この３ヶ月間で研修後、計画書作成というゴールに向かって進めました。 ・研究計画書の作り方を初めてちゃんと教えて頂けた。テーマを決めるのに業務改善の視点でも良いとわかった。

表 8 継続編セミナーに参加して良かった点（一部抜粋）

第1回 ・研究方法について知れた点 ・クリティークを行ううえでの視点・チェックポイントを知れた点 ・継続編があり、自身の研究にも役立つ内容でした。
第2回 ・基礎となる部分を学べた点 ・質的研究について学べた点
第3回 ・統計について知ることができた点 ・査読など、自身が学会等で求められる内容を体験できた点 ・他院の方と意見交換ができた点 ・発表に対するアドバイスを頂けた点

Ⅴ．今後の課題

本年度は、これまでのセミナー内容を基礎編として位置付け、新たに継続編を設けた。継続編は、過去２年間に基礎編を受講した方のみを対象に募集したが、基礎編が少人数制であったため、応募者数は予想より少なかった。来年度は、過去の基礎編受講者に限らず、広く参加者を募集する予定である。

家族への看護を考える会：家族看護フォーラム

井上敦子　中山美由紀

Ⅰ．活動目的

社会の変化に伴い、家族の在り方や価値観は多様化し、家族が抱える課題も複雑化している。病気や障害を抱える人とともに生活する家族が複数の課題を抱えている場合も多く、療養者を含めた家族全体を看護の対象として支援していく必要がある。しかし、臨床実践においては、限られた家族とのかかわりのなかで家族に関する情報を整理し、アセスメントしてかかわることに困難感を抱く看護師も多い。

このような現状から、今年度は、『多様な家族への支援を考える』をテーマに、臨床における家族看護実践の向上を目的とし、家族看護フォーラム開催したので以下に報告する。

Ⅱ．活動内容

1. 対象者
   家族看護に興味のある臨床看護師
2. 募集方法
   家族看護フォーラムのチラシ（左記）を本学看護実践研究センター公開講座案内に同封し、大阪府下の2200 施設に配布。
   家族看護分野ホームページおよび看護実践研究センターホームページにも掲載し参加を呼びかけた。
3. 参加費　1,000 円
4. 開催日時・場所
   2024 年 11 月 10 日(日)14:00～16:00
   大阪公立大学　I-site なんば（C2・3）
5. 内容
   「多様な家族への支援を考える」をテーマに、第１部として「家族看護の基礎」「現代の多様な家族」に関する講義、第２部は、「実践事例紹介」として救急・ICU および退院支援における家族看護を取り上げ、事例を交えた講義を行った（表１）。
   フォーラム終了後、大学 CMS フォームを用いて参加者に家族看護フォーラムの内容に関する評価および感想の入力を依頼した。個人特性および参加の動機等については、申込み時に入力を依頼した。

表１．家族看護フォーラムの具体的な内容

テーマ：家族看護フォーラム　～多様な家族への支援を考える～	
第１部：家族看護の基礎	
『家族看護の基礎』	佐藤　美樹（家族支援専門看護師） 所属：大阪府済生会中津病院
『現代の多様な家族』	山口　望（家族支援専門看護師） 所属：市立豊中病院
第２部：実践事例紹介	
『救急・ICU における家族看護』	永野　晶子（家族支援専門看護師） 所属：大阪ろうさい病院
『退院支援における家族看護』	藤原　真弓　（家族支援専門看護師） 所属：堺市立総合医療センター

Ⅲ．参加者の概要およびアンケート結果

１．参加者の概要（申込者 79 名／参加者 64 名／アンケート回答者 42 名）

１）年齢：参加者（名）

	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代以上
人数（／79）	10	18	32	18	1

２）臨床経験

	0～5 年	6～10 年	11～15 年	16～20 年	21～30 年	31 年以上
人数（／79）	9	9	13	18	26	4

３）所属分野

	病棟	外来	救急室	ICU･HCU	地域連携	その他
人数（／79）	35	8	4	11	8	13

４）看護専門学校・大学等で家族看護を学んだ経験

有　17 名　無　62 名　／　79 名

有：大学・大学院 、認定看護師教育課程

５）今までに研修会などで家族看護を学んだ経験

有　20 名　無　59 名　／　79 名

有：講義(兵庫県立大学) 研修会(看護協会、東海大学、ACP 関連、渡辺式家族看護等)

6）この家族看護フォーラムを何で知りましたか？（複数回答可）

	病院掲示チラシ	公大看護の HP	上司や同僚の紹介	その他
人数(／79)	58	5	9	11

その他（自由記載）：家族看護学会、知人の総会、同期や友人からの情報等

7）この家族看護フォーラムに参加したいと思ったのは何故ですか？（複数回答可）

	テーマ	講 師	公大の開 催	交 通至 便	開 催時 期	過去の講座	その他
人数（／79）	79	3	9	9	6	3	1

その他（自由記載）：

・退院支援を行う際に、必要性を感じるため
・在宅ケアや退院支援に家族の支援の有無は大きな影響があると感じているため
・ファミリーハウスとして家族への相談支援をすることが多く、家族看護について考えることが多く、改めて学びたいと思ったから
・現場で看護する中で、自分がしていること考えが偏ってきてないか、確認したいと思った
・家族が入院したときに望むことを知りたい
・家族にどのような看護が出来るか学びたいため

2．家族看護フォーラム参加後のアンケート結果

1）家族看護フォーラム評価（回答 42 名／参加者 64 名）

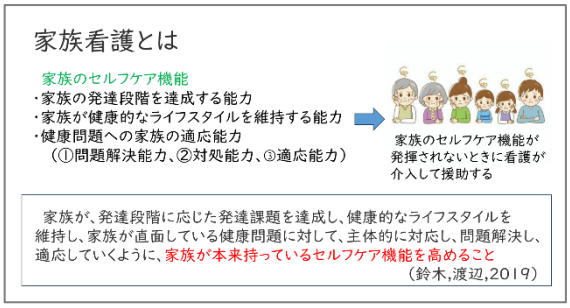
	大変興味深かった	興味深かった	どちらともいえない	興味がなかった	全く興味がなかった
家族看護の基礎	24	16	2	0	0
現代の多様な家族	24	18	0	0	0
救急・ICU における家族看護	23	18	1	0	0
退院支援における家族看護	32	10	0	0	0

2）家族看護フォーラム「第Ⅰ部」「第Ⅱ部」の感想(一部抜粋)

「家族看護の基礎」について

・家族看護について、キーパーソンに焦点を当ててしまっていたが、多様化していく中で大切なことを学ぶことができました。

・ 総合病院の急性期病棟で勤務しているが、家族看護を勉強する機会が近くになったので、今回参加することができてよかった。家族看護専門看護師の講義をずっと受けたくて探しいてやっと見つかった。



(講義資料抜粋)

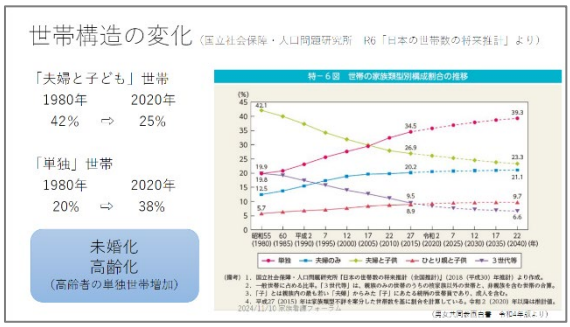
・ 家族の価値観、家族のあり方、事情などを自分の価値観と違うと捉えて考えて寄り添うことが大切であることと同時に難しさを感じた。

「現代の多様な家族」について

・データーを元に分かりやすい講義で背景がよく分かりました。

・ 社会情勢のデーターをもとに説明を聞き、現在の家族が本当に多様化になっているとよく理解できました。

・ 時代背景などもわかり今後の関わり方ついて知れた。

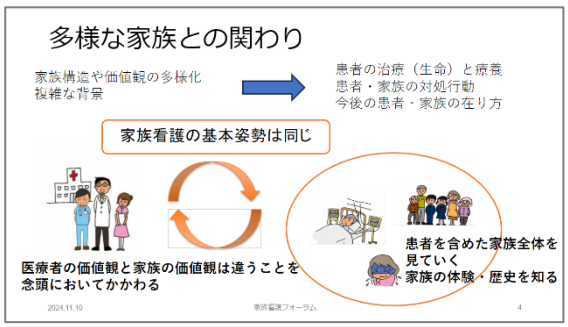


(講義資料抜粋)

「救急・ICU における家族看護」について

・超急性期ではプライマリー看護師では関わりが浅いので他職種連携の必要さを改めて感じた。

・ HCU に所属して半年なのですが、患者の治療に集中しすぎて、家族の存在を二の次にしてしまっている自分がいました。家族看護の必要性を理解できました。



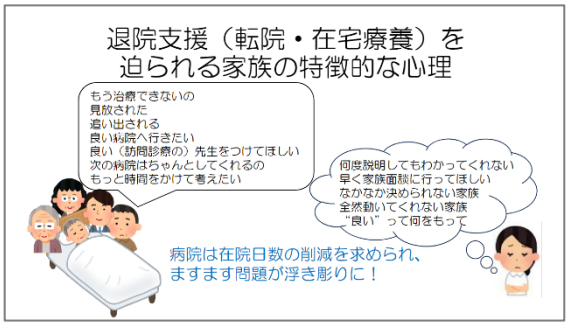
(講義資料抜粋)

・ 症例発表が興味深く、アセスメントや関わり方など具体的に発表していただき、今後の実践に役立てると感じた。

「退院支援における家族看護」について

・家族の背景が具体的でとても想像がつきました。当たり前に思っている情報収集の視点をいろんな人と共有することって大切と改めて思いました。

・退院支援を、日々行っています。事例に似たケースにたくさん出会っているので、たくさん勉強できました。ありがとうございました。



（講義資料抜粋）

・患者家族をありのままを受け入れて中立的な立場で患者家族していくこと、また組織的にできることと出来ないことを共有しておくことは支援していくなかでほんとに大切であると思いました。

・専門看護師が実際にどのように対応しているのか、態度や言葉かけの内容など実際をみてみたい、そこも学びたいと思った。次に活かしたい内容であった。

3）家族看護フォーラム全体の満足度について（回答 42 名／参加者 64 名）

満足できた	ほぼ満足できた	あまり満足できなかった	満足できなかった
28	14	0	0

4）家族看護フォーラムへの意見・感想など（一部抜粋）

・多様な家族関係が増え、誰がキーパーソンなのか、キーパーソンになりうるのか等、悩んだり考えたりすることが多いのでとても勉強になりました。

・実際のケースが聞けたので、自分のケースを振り返る事にも繋がり良かったです。

・入院期間が短縮され患者自身や家族を取り巻く環境の不安さが高くなっていると日々実感しています。もっと時間をとりながら話しを聞いてあげられるようにしたい反面業務に追われる日々で自分も葛藤しています。短時間でも立ち止まり話しを聞けるようにしたいと思える研修でした。

・困った家族と決めつけず支援を必要としている家族ほど時間をかけて向き合い情報収集をして行く必要があることを学ぶことができました。事例やジェノグラムがあったことでわかりやすく理解しやすかったです。今回の学びを日々の関わりに生かし、退院支援看護師とも密に共有していくことができればと考えます。

・家族看護を学んでいない看護師への教育方法について知りたい。家族看護は在宅領域と思われているのが多い。臨床現場でも家族看護を理解して看護することは大切なので、看護職全体にこの知識を広めて欲しい。

・専門看護師が実際どのような活動をしているのかもう少し詳しく知りたい。

・難渋した症例について、もっと聞きたい。
・初めて参加しました。看護協会の研修とはまた異なり、いろんな講師の家族看護専門看護師の話が聞けて良かったです。ありがとうございました。
・とても勉強になりました！そして、家族看護を頑張ろうと思えました。

Ⅳ．まとめ

今年度も多くの臨床実践する看護師に参加いただくことができた。定員を昨年度の 100 名から 80 名に減らし、参加者同士でディスカッションする時間を設け、それぞれの家族看護実践や実践における課題、困りごとを共有することで、実践をふり返ることにもつながったと考える。ディスカッションは短時間であったが、経験年数の長い看護師の参加が多く、活発な意見交換が行われていた。アンケート結果からも臨床のニーズに沿った内容であったと評価することができる。

また、専門看護師の実践を広める貴重な機会となり、経験年数の浅い家族支援専門看護師や大学院生の教育に関する学びにもつながっている。

難渋するケースへの対応や臨床での家族看護教育に関する要望もあることから、引き続き、学習ニーズの把握に努め、家族看護実践に寄与することができるよう活動を継続していきたいと考える。

会場の様子

家族への看護を考える会メンバー

２．府民健康支援部門

(1) 大阪府民の健康・防災プロジェクト

(2) 暮らしの保健室における住民育成活動看護職のための継続教育実践講座

(3) 発達障がいをもつ子どもの社会生活スキル(Social Skill)の獲得　　への支援に向けて-養育者、並びに彼らを支援する看護師等の保健医療福祉関係者が活用可能な支援の工夫を学ぶための勉強会-

大阪府民の健康・防災サポートプロジェクト

田中健太郎、根来佐由美、安本理抄、大野志保、都筑千景
（実践看護科学領域 生活支援看護科学分野 地域看護学）

Ⅰ．活動目的

本活動は、大阪府内の自治体・地区組織・大学が連携し、地域で生活する人々の健康づくりと防災意識の向上を図ることを目的とする。この活動では、住民の活動の場に赴き、健康相談、健康教育、防災の普及啓発等を実施し、地域住民の健康の保持増進、防災時に備えた対応力の向上を目指す。また、大学院生や学部生（学類生）も活動に参加することで、実践的な学びや経験を積み、地域で生活する人々への理解を深め、健康や防災への支援を考えるための学習の場ともなる。さらに、地域での社会貢献を通じ、コミュニケーション能力を高め、人間性豊かな看護職を育成する上でも意義深いと考える。

Ⅱ．活動内容

１．東陽ふれあいフェスタへの参加

日　時：2024 年 5 月 12 日（日）
場　所：泉大津市立東陽中学校
参加者：教員（田中、根来）、大学院生 1 名、学部生 1 名
目　的：地域における防災啓発活動ならびに健康の保持増進に向けた支援
内　容：100 円均一で作る防災リュックのパンフレットの配付、防災リュックの中身の展示、足指測定の実施
結　果：

- 東陽中学校の一室において、泉大津市健康づくり課の保健師と一緒に、足指力計測器を用いて足指力の測定や防災グッズ・ポスターの展示、100 円均一で作る防災リュック等のパンフレットの配付を行った。
- 足指力の測定には地域の子どもから高齢者まで約 100 名の方が参加。
- 足指力は、健康な体の土台作りに欠かせない力とされており、測定結果を振り返る際には、足指の状態や日常生活への関心が高まる様子が伺えた。また、参加者同士で感想を共有しながら、笑顔で振り返る姿も見受けられ、測定を通じて健康に対する意識が喚起された様子であった。
- 防災啓発活動については、来場された方からは展示やパンフレットの配付を通じて、「自身の災害への備えを振り返る機会となった」といった感想も聞かれた。

◆活動の様子

写真 1-1 会場の様子①

写真 1-2 会場の様子②

写真 1-3 足指測定の実際

2. 地域住民の方への健康教育と身体計測

日　時：2024 年 7 月 13 日（土）

場　所：羽曳が丘町会連合会第二集会所

参加者：教員（都筑、田中、根来、安本）、大学院生 4 名、学部生 3 名

目　的：地域における防災啓発活動ならびに健康の保持増進に向けた支援

内　容：NPO 法人羽曳が丘 E&L 主催の「交流サロン」において大学院生による健康教育の実施、握力・血圧測定、健康相談の実施

結　果：

- 大学院生による防災啓発活動として「歯（し）っとこ!災害時のお口のケアと備え」というテーマで健康教育を実施した。
- 50 歳代から 90 歳代までの 49 名の方が参加され、アンケートの回収数は 45 部（回収率 92%）であった。
- 災害時に口腔ケアをすることの重要性を「理解できた」「まあまあできた」と回答した方は 40 名（89%）、「あまりできなかった」と回答した方は 2 名（4%）であった。また、

健康教育を聞いて、災害に備えて口腔ケアの物品を備えようと思った方は 39 名（87%）で、備えようと思わなかった方は１名（2%）であった。

- 健康教育後には「歯磨きはいつどのタイミングでしたらいいのか」「普段は舌磨きをしているが、災害時もしたほうがいいのか」など、参加者から多くの質問が寄せられた。
- 測定会にも多くの方が参加され、自身の健康状態を把握する機会となっていた。

◆活動の様子

写真 2-1 会場の様子①

写真 2-2 会場の様子②

写真 2-3 健康教育の実際

写真 2-4 測定会（血圧測定）の様子

3. 第 83 回日本公衆衛生学会総会での活動報告

日　時：2024 年 10 月 29 日（火）
場　所：北海道札幌市 札幌コンベンションセンター
参加者：教員（都筑、田中、根来、安本）、大学院生２名
目　的：2023 年度の看護実践研究センターでの防災啓発活動の取り組みについて報告
内　容：ナッジを用いた地域住民への防災啓発（第一報）−災害の備えに着目して−
　　ナッジを用いた地域住民への防災啓発（第二報）−医療的ケア児の避難に着目して−

結　果：

- 昨年度、大学院生 3 名が主体となり取り組んできた防災啓発活動について、第 83 回日本公衆衛生学会総会でポスター発表を行った。
- 今回のポスター発表は、座長のもとで行う発表ではなく、質疑時間に発表者と参加者が自由に質疑を行う形式であり、発表内容や今後の取り組みに向けた意見交換を行った。
- 第一報で発表した、ナッジ理論を用いた「100 円均一で作る防災リュック」や「避難カードの作成」については、健康づくりや予防に関する情報発信を行う『Msb Health（ムスブヘルス）』のヘルスレポートとして、下記リンクに発表内容が紹介された。
  https://note.com/_msbhealth_note/n/nc882e282e2ee

◆学会での様子

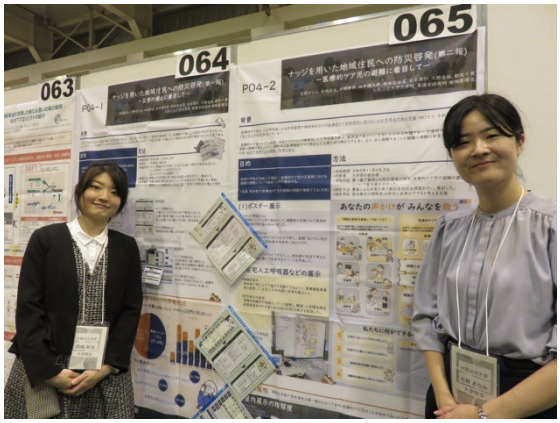


写真 3-1 ポスター会場での様子①

写真 3-2 ポスター会場での様子②

4. 千早赤阪村での防災啓発活動と握力測定

日　時：2024 年 12 月 3 日（火）

場　所：社会福祉法人千早赤阪村社会福祉協議会

参加者：教員（田中、根来）、大学院生 1 名

目　的：地域における防災啓発活動ならびに健康の保持増進に向けた支援

内　容：100 円均一で作る防災リュックのパンフレットの配付、防災リュックの中身の展示、握力測定の実施

結　果：

- 60 歳代から 70 歳代までの 11 名の方が来場され、防災グッズについての説明や握力測定を実施した。
- 来場された方からの声としては、卓上に置けるライトについて「こういったライトがあるのか」「思ったよりも明るい」などの感想も聞かれていた。
- 握力については介護予防の上でも大切な指標であることを伝え、普段測定する機会がなく、この機会に知れて良かったと話されていた。

◆活動の様子

写真 4-1 防災グッズを手に取る来場者

写真 4-2 握力測定の様子

5. 金塚ミニマーケットでの測定会と健康相談

日　時：2024 年 12 月 11 日（水）

場　所：あべのマルシェ中央広場

参加者：教員（田中）

目　的：地域における健康の保持増進に向けた支援

内　容：血圧・握力測定、健康相談

結　果：

- 高齢の方の集いの場、買い物支援等を目的に始まった金塚ミニマーケットにおいて、血圧・握力測定、健康相談を実施した。
- 50 歳代から 90 歳代までの 12 名の方が来場され、血圧や握力測定の実施や普段の生活での困り事などについて話を聞いた。具体的には「ペットボトルのキャップが開けにくくなった」「水道の栓をしっかり閉めきれていないのか水がポタポタ垂れることがある」「外出するのが億劫でこの場（ミニマーケット）が貴重な外出の機会になっている」などの声が聞かれた。

◆活動の様子

写真 5-1 血圧測定の様子

写真 5-2 握力測定の様子

Ⅲ．評価と今後の課題

今年度は、地域で生活する人々の健康づくりと防災意識の向上を図ることを目的に、泉大津市・羽曳野市・千早赤阪村・阿倍野区金塚地区で活動を行うことができた。

健康づくりへの取り組みとして、今年度は握力測定を多くの会場で取り入れたが、介護予防の指標として重要であることを伝えた上で実際に測定することで、自身の健康状態を知るきっかけとなったと考える。また、防災意識向上に向けた取り組みとしては、各会場での防災グッズの展示を通じて、多くの方が防災への取り組みに興味を示すなど、将来への備えや防災意識向上に繋がったと考える。特に、大学院生が主体となった地域住民の方々への健康教育では、事前に地域の交流サロンに参加し、対象となる方々と直接話を行い、地域の特徴やニーズを踏まえた上で企画立案したことで、地域の実情に即した取り組みになったと考える。実際、健康教育後のアンケート結果からも、災害時における口腔ケアの重要度につい理解を深め、災害に備えたきっかけ作りになるなど、防災意識向上に働きかけることが出来たと考える。

また、昨年度取り組んできた、防災啓発活動のまとめを学会で発表するなど、実践から報告まで継続的な活動として取り組むことができたと考える。発表後には「100 円均一で作る防災リュック」などのナッジ理論を活用した取り組みについて、その新規性やアイデアが評価され、健康づくりや予防に関する情報発信を行うウェブサイトを通じて、大阪府内の活動に留まらず、全国にも情報が発信されるなど、発展性を持つ取り組みになったことは大きな成果であったと言える。

地域での活動においても、大学院生や学部生の参加を通じて、実践的な学びの機会があり、地域住民との交流を通じて健康支援や防災啓発活動を体験することができたことは、地域に根ざした支援活動に対する理解と関心が深まり、教育的な成果であったと考える。

今後の課題としては、これまでの活動では高齢者の方に向けた活動が中心であったが、若年層や子育て世代にも目を向けたアプローチや学校や地域イベントとの連携を強化し、幅広い世代への取り組みが必要であると考える。また、地域ごとのニーズに合わせた活動を継続する上でも、自治体や関係団体との連携、学部生に対し地域での活動に興味関心を抱く環境をいかに整えていくかが重要であり、今後も継続的に取り組んでいく必要があると考える。

最後に、本活動にご協力いただきました、関係機関の皆様、地域住民の皆様に深く感謝申し上げます。また、本活動にあたり、看護実践研究センタープロジェクト活動支援助成につきまして、心より御礼申し上げます。

暮らしの保健室における住民育成活動

篠原真咲・三輪恭子（看護実践科学領域 生活支援看護学分野 在宅看護学）
江口陽貴・坂口晴美（博士前期課程実践看護研究コース１年）

Ⅰ．活動目的

近年、既存の制度や枠組みに囚われずに、地域の相談窓口や交流スペース、訪問看護ステーション等を基盤に中長期的に住民と関わり、パートナーシップを形成しながら、その専門性や知識を活かした柔軟な活動を展開する看護職の活動が注目されている。

暮らしの保健室は 6 つの機能があり、①暮らしや健康に関する「相談窓口」、②市民との「学びの場」、③受け入れられている「安心できる場」、④世代を超えてつながる「交流の場」、⑤（医療・介護・福祉）の「連携の場」、⑥地域ボランティアなどの「育成の場」である。

2022 年度より「暮らしの保健室」として住民の健康増進にむけた活動を開始し、3 年目となる今年度は、昨年度課題に挙がった活動の継続性や参加者の拡大、地域の住民同士のつながりを強化する取り組みを行った。

Ⅱ．活動内容

1. 活動拠点

本活動の拠点は、羽曳野市の羽曳が丘三丁目商店街に位置し、介護事業を展開している山勝ライブラリ（https://www.yamakatsu-library.com/）が運営主体である住民交流スペース「ライブラリとなり」とした。

山勝ライブラリが 2017 年に開設したカフェ「FIKA 三丁目」は、高齢者を中心とした住民同士の交流場所となっている。いつも笑顔の女主人が温かく見守り、誰も孤独にならないこの場所が地域の人たちの集いの場となり、安心してみんなが笑顔になれる場所となっている。2022 年 9 月に、「FIKA 三丁目」の“となり”の店舗が閉店することに伴い、レンタルスペース「ライブラリとなり」が開設され、本活動に適した場所であると考え、活動拠点とすることとした。これらの経緯や住民の“となり”に寄り添える場所になるよう思いを込めて、本「暮らしの保健室」を“となりの保健室”と命名した。

2. 参加者の募集方法

となりの保健室への参加者の募集は、カフェ「FIKA 三丁目」にチラシを置き、参加者を募った。活動場所のスペース上、10 名を定員とした。年齢や性別、疾患の有無は問わないこととした。

3. 活動内容

2024 年 5 月～2025 年 3 月までの計 10 回開催した。テーマと内容は、健康や暮らしに関する話題を提供し、住民同士のつながりを強化する取り組みとなるよう参加型講義を取り入れ、主体

的に参加できるよう構成した（表 1）。

表 1　となりの保健室の活動内容

回	開催日程	テーマ	話題提供者
1	5 月 21 日（火） 14 時～16 時	美肌作りのスキンケア	篠原
2	6 月 4 日（火） 14 時～16 時	うんこさん保健室「観便」	山本・小林（訪問看護師）
3	7 月 31 日（水） 14 時～16 時	認知症世界の歩き方	三輪
4	9 月 3 日（火） 14 時～16 時	うんこさん保健室「食事」	山本・小林（訪問看護師）
5	10 月 3 日（火） 14 時～16 時	防災力アップ！地域で守る命と暮らし	江口
6	11 月 26 日（火） 14 時～16 時	自分を癒す　お灸教室	森澤（鍼灸師）
7	12 月 3 日（火） 14 時～16 時	うんこさん保健室「生活習慣」	山本・小林（訪問看護師）
8	1 月 22 日（水） 14 時～16 時	もしもの時の話をしませんか	松本（緩和ケア特定 CN）
9	3 月 4 日（火） 14 時～16 時	うんこさん保健室「すごろく」	山本・小林
10	3 月 11 日（火） 14 時～16 時	健康は足元から ～ロコモ対策で元気な毎日を	坂口

Ⅲ．活動結果

1.参加者の状況

となりの保健室には 8～10 名、うんこさん保健室には 6 名程度の参加があった。参加者の多くは、カフェ「FIKA 三丁目」の利用者であったが、参加者同志で声を掛け合って参加する姿も多く見られた。また、カフェの女主人がしばらく来ていない方に電話をして教室の内容を知らせることで参加する方もみられた。

参加者の年齢は 70～80 代が中心で（図 1）、男性よりも女性の方が多かった（図 2）。

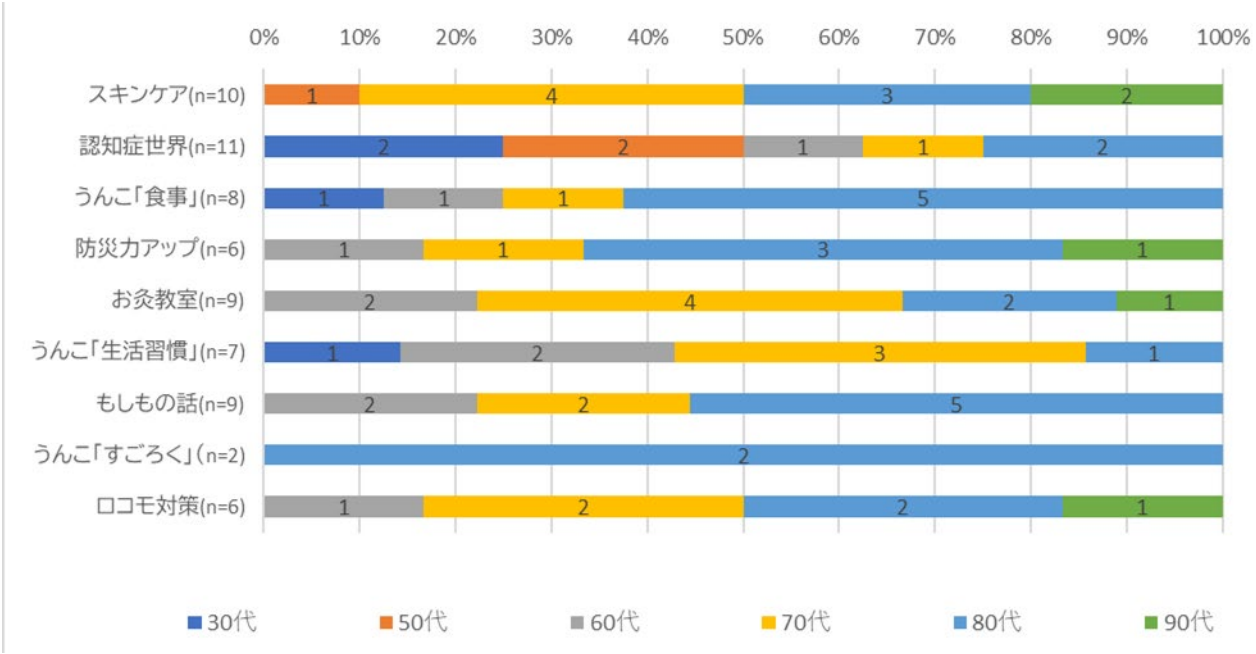


図 1　参加者の年齢

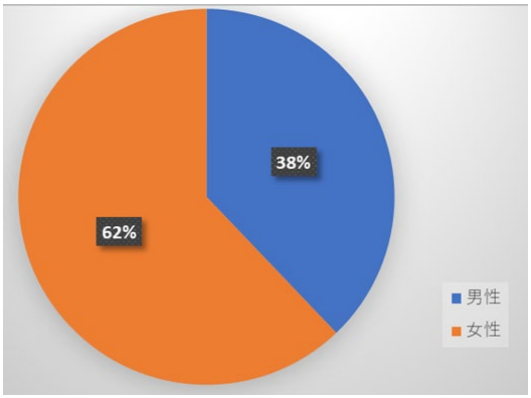


図 2　参加者の性別

2. 各講座の理解度・満足度

参加者に行ったアンケートの結果から、各回の内容は「よくわかった」「まあまあわかった」と回答した者が 100%であった（図 3）。となりの保健室への満足度は「とても良かった」「まあまあ良かった」と回答した者が 100%であった（図 4）。また、自由記述から、参加者同士の交流を楽しみ、テーマについての関心や理解を深める機会となったことがわかった（表 2）。

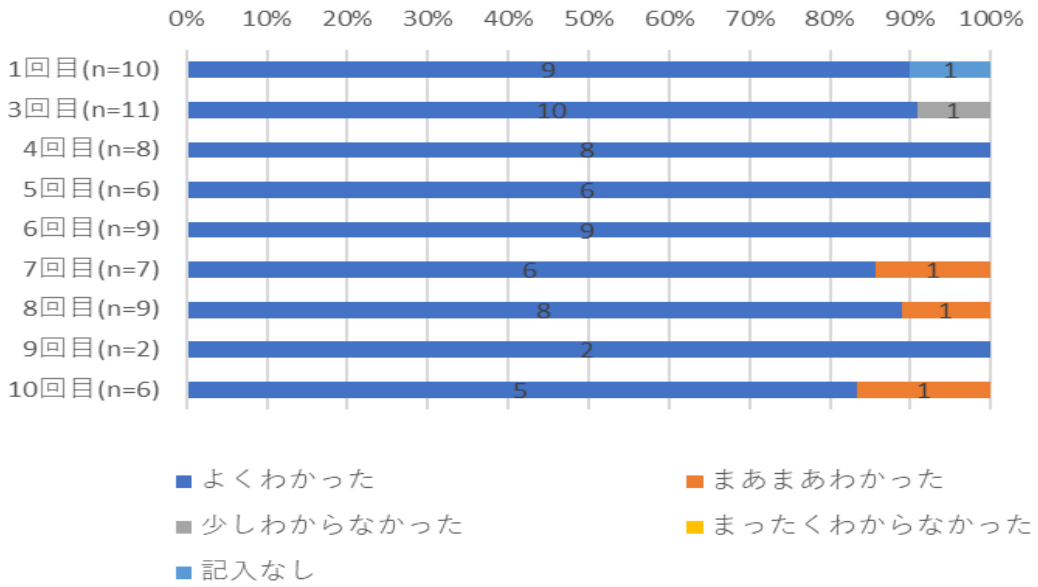


図３　内容の理解度

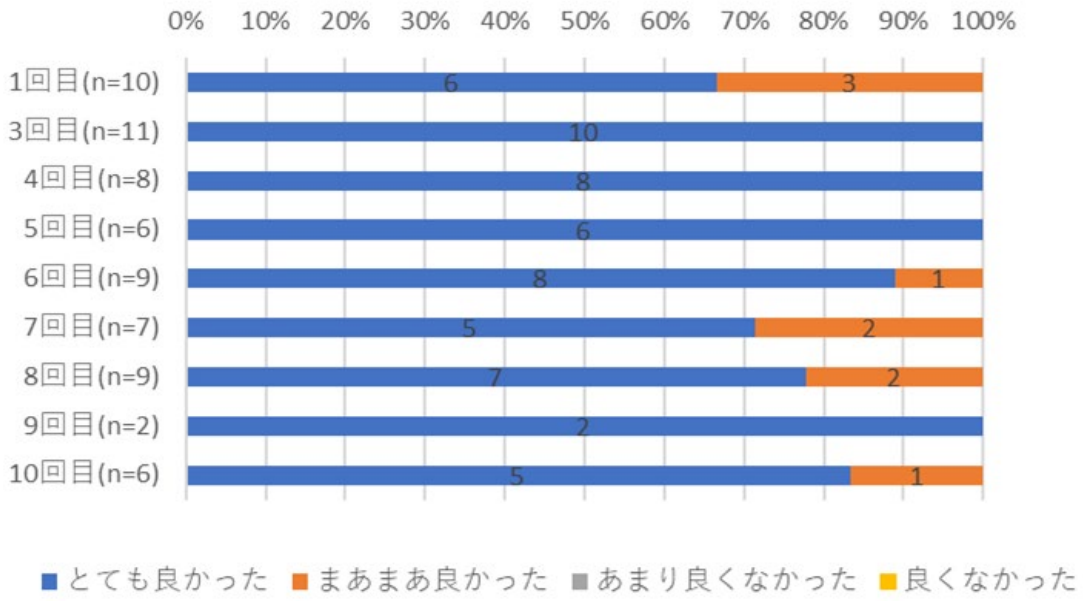


図４　満足度

表２　となりの保健室への感想（自由記述から一部抜粋）

・これからも続けてほしい
・防災のことも知れて、「の町に住んでいてよかった。」と改めて感じた。
・病気のことも分かってれる人がいて、ここに来れることが生きる張り合いになっている。
・１人暮らしだから、ここに来る事が日課になっているよ。このカフェがあって有難い。
・耳が遠くなったせいか、声が聞き取りにくくて聞こえないこともある。

お灸は、どれがいいかな？
熱さも選べるのね！

ここがツボだよ！

認知症になると、こんな風に見えるんだね。なるほど・・・

地図を見ながら、自宅周辺の防災について学ぶ。真剣に学び、住んでいる街の良さを再確認！！

うんこさん保健室のすごろく
ゲーム感覚でやると楽しく学べるね！

握力測定、何年ぶり・・・

Ⅳ．活動の評価

今年度は、となりの保健室の 3 年目の活動として、拠点場所と参加者の口コミにより開催を楽しみに待ってくださるリピーターも含めて参加者が増えた。より住民同士のつながりが強化できるように、ケアプランセンターのケアマネジャーや地域の関係機関、ヘルスケア関連企業等と協働しながら、計 10 回開催した。

70～80 代の参加者が多く、現在の健康に関する心配だけでなく、将来の健康や介護、生活に対する不安があることが示唆された。参加者は、主に同じ街に暮らし、なんとなくはつながりがある場合もあり、お互いに少し遠くから様子を見ていたが、となりの保健室に通うようになり、昔話に花が咲いたり、お互いの介護を労い合ったりと行ったより密な関係性と互いを思い合う様子が多く見られた。その中で、「○○さん、最近少し痩せたような・・・。昔は畑仕事してお野菜も沢山作って、おすそ分けしてくれてました。」などの会話も聴かれた。温かい空気がながれ、無理しなくても自分の事を話せる雰囲気があり、心地よい様子であった。これまでの活動の継続により住民同士のつながりが醸成されてきており、参加者の学びの場としても、安心できて交流できる、何かあれば相談できる場となりつつあることを実感し、暮らしの保健室の機能を果たせているのではないかと考える。

さらに博士前期課程実践看護研究コースの院生にとっては、となりの保健室のテーマ選定や内容の検討、話題提供を計画・実施するといった一連の流れを経験し、在宅看護専門看護師にとって必要な住民に対するアプローチを実践できる貴重な機会となっている。

また、本年度は本学のリハビリテーション学科や経済学部の教員が関心を寄せ、実際の様子を見学し、それぞれの専門分野からの意見交換ができた。これらの知見を今後の活動につなげていきたい。

Ⅴ．今後の課題と展望

本活動は、教員や大学院生の本来の業務をしながらの活動であるため、実施できる回数や資金には限界がある。となりの保健室事業は、枠にとらわれずに住民同士が繋がり、自助や共助を強化することで、さらに自分たちの住む街を自分たちで住みやすい街にしていけるよう、住民が主体的に保健室の開催に参画してもらえるように支援していきたいと考える。

謝辞

本活動にあたり、2024 度 大阪公立大学大学院看護学研究科 看護実践研究センター活動支援の助成をいただき、心より感謝申し上げます。

発達障がいをもつ子どもの社会生活スキル（Social Skill）の獲得への支援に向けて
―養育者、看護師等の保健医療福祉関係者が活用可能な支援の工夫を学ぶための勉強会―

奥野裕子[1] 柱谷久美子[1] 古山美穂[2]
1.大阪公立大学実践看護科学領域 生活支援看護科学分野 精神看護分野
2.大阪公立大学実践看護科学領域 家族支援看護科学分野 母性看護・助産学

1. 活動目標

発達障がい、特に自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：ASD）や注意欠如多動症（Attention Deficit Hyperactivity Disorder；ADHD）をもつ子どもをもつ養育者、看護師等の保健医療福祉関係者を対象に、子どもたちが課題とする社会生活スキル（Social Skill）の獲得への支援を促すべく、昨年度に引き続き、社会生活スキルに特化した支援の工夫に関する勉強会を実施し、勉強会実施後の参加者のアンケート等から活動成果とその課題を確認する。

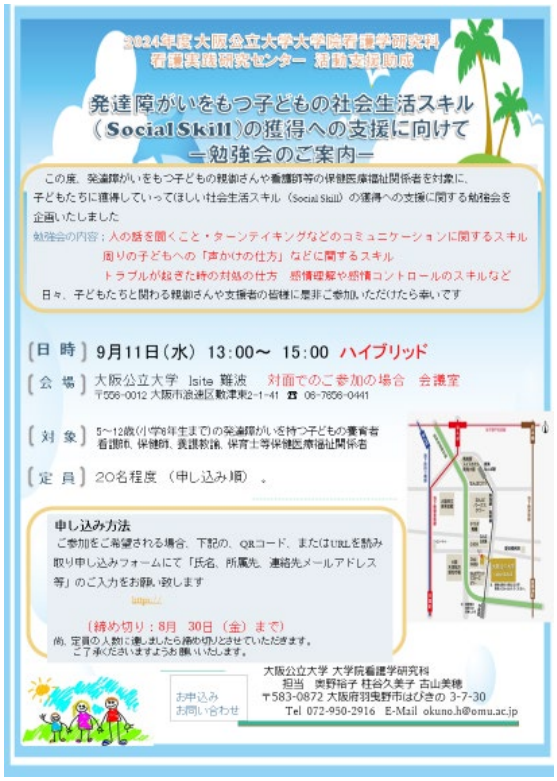
活動内容

対象；発達障がいを持つ子ども（5 歳～12 歳まで）の養育者、または発達障がいをもつ子どもを支援する看護師、保健師、養護教諭、保育士等の保健医療福祉関係者 20 名程度。
対象者の募集は、大学 HP や行政機関を通じて勉強会に関する案内をし、希望者を対象とした。
日時；2024 年 9 月 11 日 13 時～15 時
場所；I-site なんば 会議室
勉強会のプログラム内容は、奥野ら（2016）のプログラムを参考に本活動事業に合わせて適宜修正して実施する。勉強会は下記のスケジュール内容で実施した。

プログラム

	*挨拶（自己紹介）
Session1	人の話を聞くこと（「聞く」スキルの重要性）・ターンテイキングなどのコミュニケーションに関するスキル 30分
Session2	・周りの子どもへの「声かけ（頼み事の仕方、仲間への誘い方・仲間への入り方）」「断る」「諦める」などに関するスキル ・トラブルが起きた時の対処の仕方 30分
Session3	感情理解や感情コントロールのスキル 30分
Session4	グループ討議 30分

活動の評価：勉強会実施後には、当該勉強会の感想や意見を聴取した（google フォームを用いて、Web 上で実施）。
安全等への配慮；勉強会の際には、安全に留意した部屋を設定し、研究代表者等2名以上が同席することで、事故防止に留意した。
倫理的配慮：
代表者が、対象者に対し本活動実施内容の説明アンケート調査・倫理的配慮等について口頭で説明し、同意を得た。



2．　活動の実施報告

1）　参加者

勉強会に参加した 18 名のうち 11 名より回答を得た(61%)。 以下にアンケート結果を示す。

(1)アンケート回答者の年代について

「20 代」が 0 人(0%)、「30 代」が 3 人(27%)、「40 代」が 7 人(64%)、「50 代」が 2 人(18%)、「60 代」が 0 人(0%)であった。

(2)アンケート回答者の有する資格等について

「看護師、保健師、助産師等医療従事者」が 6 人(55%)、「保育士、幼稚園教諭等」が 1 人(9%)、「小学校教諭、中学校教諭」が 0 人(0%)。「養護教諭」が 2 名(18%)、「公認心理師、臨床心理士等」が 1 人(9%)、「保護者」が 1 人(9%)だった。

(3)勉強会に参加した理由について

「勉強会内容に興味があった」と答えた人が 9 名（82％）、「職場上司・知人から勧められた」と答えた人が 1 人（9％）、「その他」と答えた人が 1 人（9％）だった。

(4)「勉強会内容にどのくらい興味を持ったか」について

アンケート回答者 11 名全員から「とても興味深かった」という回答が得られた。

(5)「勉強会内容は今後自身の育児や仕事の上で役立つと思うか」について

「とても役立つ」と答えた人が 9 人(82%)、「まあまあ役立つ」が 2 人(18%)「あまり役立たない」が 0 人(0%)、「全く役立たない」が 0 人(0%)だった。

(6)「勉強会に参加したことにより SST に対する考えや思いは変化したか」について

「とても変化した」と答えた人が 1 人(25%)、「やや変化した」が 2 人(50%)、「あまり変化しなかった」が 1 人(25%)、「まったく変化しなかった 」人が 0 人(0%)だった。

(7)「勉強会に参加したことにより SST に対する考えや思いはどのように変化したか」について

表1に、回答者「とても変化した／やや変化した」の一部自由記述内容を示す。

表 1. SST に対する考えや思いはどのように変化したか(一部抜粋)

・診断いただいた医療機関から、子どもに問題行動が出た時は「行動を受け入れるしかない」と助言を受け、そんなもんかと思っていたが、SST に取り組んで子どもに学ぶ機会を設けないと、ずっとできないままなんだと考えが変化した。
・話を聞く、共有、共感、時間をかけて対話することの大切さがよくわかりました。
・意識して子どもと接するようになりました。

(8)勉強会への満足度について

回答者全員(11 名)から「とても満足した」という回答が得られた。

(9)「このような勉強会にまた参加してみたいと思うか」について

回答者全員(11 名)から「とても思う」という回答が得られた。

(10)本勉強会についての感想、今後の活動への要望等について

表 2 に、自由記載内容の一部を示す。

表 2. 勉強会についての感想、今後の活動への要望(一部抜粋)

・様々な知識を提供していただき、ありがとうございました。我が子に対して、いろいろと試してみたいと思いました。
・SST はとても大切だと思いました。発達障害のお子さんの中には、他者と上手く関わりたくても上手く行かなかったり、感情のコントロールが上手くできないことで失敗体験を重ねている子もよくいます。お子さんのことを考えると努力しているのに失敗体験を重なるのは、辛いだろうと思います。SST によってお子さんが安心して過ごせる日が増えると良いです。

・日々、実践していることが理論的なこととどう結びつくのかが理解でき、今後、自分の実践を言語化・可視化する際にとてもためになる講義でした。序盤の講義においては、少しペースが速かったかなと思いました。ご家族の方も参加されていて、出会いの場としてもありがたかったです。
・様々な立場の方が一緒に勉強会に参加できる機会というのはなかなかないので、とても良い機会でした。支援の勉強をしたことはありますが、日々の生活の中でつい基本的なことを忘れてしまうこともあるので、勉強会で改めて子どもたちへの関わり方を再確認できて良かったです。もし可能でしたら、実践された方の成功談や失敗談なども伺えれば、今後の子どもたちへの関わりの参考にできるかな、と思いました。今日はありがとうございました。
・具体的な手立てを繰り返し行うことで身につけることができることが、就学前にはたくさんあり、成功体験も重ねられる機会があることを常に頭に置きながら気になる子に接し、支援についてクラス担任と共有していきたいと思います。ロールプレイも具体的で参加されている保護者の方にも参考になると思います。ありがとうございました。本日の資料もいただけると助かります。よろしくお願いします。
・講義内容がとてもわかりやすく、ロールプレイで具体的にどうすれば良いかがよくわかりました。障害の特徴を理解しできないことに寄り添い時間をかけて話を聞くことがいかに大切かがよくわかりました。が、いつも講義を聞いて納得して帰るのですが、なかなか実践できないのが現実です。親の感情のコントロールも必要だなと帰って子供と話しながら思いました。障害を指摘されて〇年ですが、自分の子供のことが全然理解できません。自分と子供のために機会があればまた勉強会に参加したいと思います。今日は貴重な講義をありがとうございました。また次回もよろしくお願いいたします。
・発達障がいの有無にかかわらず、感情を言葉に結び付けて自己覚知し、思いを言葉で表現して相手に伝え、自分の気持ちを整理して落ち着かせるなどのコントロールをしていく力を身につけていく事の大切さと、個の理解に応じた分かり方を一緒に探す事が大切だと改めて感じました。ありがとうございました。
・2 時間という短い時間の中で講義とロールプレイ、参加者の質疑応答や感想がバランスよく盛り込まれていて、充実感のある内容だったと感じます。この会に継続して参加することで自分や子どもの成長や変化を感じられました。初めて参加したときは子どもの出来ないことばかりに目が向いて、気持ちが落ち込む部分もありましたが、今回は自分が意図的に対応できているところや子どもができていることに目を向けられて、帰った後も子どもをいつも以上にかわいいと思えました。頼れる専門家に話を聞いてもらうこと、知識を得ること、自分なりに試行錯誤する期間も大事なのだと感じました。HP 開設やペアトレの開催など楽しみにしております。今後ともよろしくお願いいたします。

4．まとめ

今回の勉強会では、主に保護者や大学関係者が多く参加され、多くの参加者から満足したとのアンケート結果を得た。

社会生活スキルトレーニング（Social Skill Training: SST）は、昨今、学校や医療機関、療育施設などで幅広い対象に用いられるようになっているが、特に発達障がいをもつ子どもでは、彼らが生活する場において、自分らしく適応的な社会生活を送るための社会生活スキル（Social Skill）の獲得は不可欠である。

今回、上記の勉強会に加えて、大阪府ペアレントメンター事業より、ペアレントメンターの講演会の依頼があり、第 2 回の勉強会(2025 年 1 月 23 日 I-site なんば)を実施した。お二人のペアレントメンターの方に来ていただき、ここでは、これまでの子育てにおける難しさ、家庭での工夫などを具体的に丁寧に語っていただいた。メンターの方のお子さんは、すでに成人し、社会経験もお持ちと言うこともあり、発達過程における大変な時期を乗り越えての今の心境など、振り返りや反省なども実直にお話しいただきました。終了後、参加者 5 名全員より、「満足した」との回答を得ました。自由回答について、一部ではあるが下記に紹介させていただく。

「子育てに取り入れようと思う事がたくさんありました。気持ちも楽に、子どもに優しい気持ちで接する事ができそうです。」「家族の方の経験談には今のままでもいいんだと思える安心感や希望、こんなこともやってみたらいいかもしれない、やってみようと思える勇気をもらえました。実際にやってよかったこともとても参考になりました。参加者も当事者の家族の方が中心で少人数の会であったのも雰囲気がほっこりあたたかいものに感じられました。また可能な限りこういった会に参加させていただきたいです。」

最後に、今後も発達障がい、またその特性を持つ子どもたちが適応的な社会参加が実現

できるよう、子どもたちとともに日常生活を過ごし常にサポートする保護者（共同治療者）、また看護師や保健師、養護教諭などの保健医療福祉分野関係者とたいして、社会生活スキルに関する学びの機会提供が重要であると考える。

今回の参加者から頂いたご感想をもとに、今後もより良い勉強会等の企画、継続的な活動につとめたい。

5.参考文献

・岡田智．上野一彦編著：特別支援教育実践ソーシャルスキルマニュアル、明治図書、2006

・岡田智編著　上野一彦監修：特別支援教育をサポートするソーシャルスキルトレーニング（SST）実践教材集、ナツメ社、2014

・Hiroko Okuno, Tomoka Yamamoto, Aika Tatsumi, Ikuko Mohri, Masako Taniike. Simultaneous Training for Children with Autism Spectrum Disorder and Their Parents with a Focus on Social Skills Enhancement.Int J Environ Res Public Health,14;13(6). pii: E590. doi:10.3390/ijerph13060590. 2016.

6．謝辞

本活動にご参加いただき、またアンケート調査にご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。

３．国際・国内学術研究推進部門

(1) 入院患者の音環境を整えるためのベストプラクティスの構築

(2) 同じ担当保健師の継続支援と乳幼児をもつ保護者の専門職への認識と関連研究

2024年度　大阪公立大学大学院看護学研究科　看護実践研究センター
国際・国内学術研究支援　成果報告書

報告年月日　2025年2月25日

	氏名	所属機関・領域・小分野
研究代表者	園田　奈央	大阪公立大学大学院看護学研究科 実践看護科学領域・看護情報学

研究課題名	入院患者の音環境を整えるためのベストプラクティスの構築

研究成果の概要

【研究背景・研究目的】

入院患者はストレスに対処する能力が低いため、WHOは病床環境における1日の騒音レベル（等価騒音レベル）が35dB、夜間の騒音レベル（等価騒音レベル）が30dBを超えないことを強く推奨している。しかし、大学病院の病室内の1日の騒音レベル（等価騒音レベル）は60dBを超えていたことが報告されており、音環境を整えるための効果的な看護実践が求められている。

本研究は、入院患者の音環境を整えるためのベストプラクティスの構築に向けて、(1)病床環境における騒音レベルの実態及び、騒音の原因、(2)音環境が入院患者の心身の健康に及ぼす影響、についてのエビデンスを統合することを目的とした。

【研究方法】

(1)と(2)について、エビデンスを統合するために、スコーピングレビューを実施した。スコーピングレビューは、PRISMA-ScR（PRISMA Extension for Scoping Reviews）と JBI Manual for Evidence Synthesis に準拠して実施した。データベース検索にはPubMed、CINAHL Plus、Cochrane Libraryを用いた。論文の特定、選抜（一次スクリーニング）、適格性の評価（二次スクリーニング）、データ抽出は2名が独立して実施した。

【研究結果】

各データベースから計5,850論文を特定した。選抜と適格性の評価を行い、(1)は50論文、(2)は28論文を抽出した。(1)は現在、データ抽出を行っている。(2)は論文投稿中である。

【様式 1-2】

2024 年度　大阪公立大学大学院看護学研究科　看護実践研究センター
国際・国内学術研究支援　成果報告書

報告年月日　2025　年　2　月　17　日

	氏名	所属機関・領域・小分野
研究代表者	横山　美江	大阪公立大学看護学研究科 ヘルスプロモーションケア科学分野

研究課題名	同じ担当保健師の継続支援と乳幼児をもつ保護者の専門職への認識との関連

研究成果の概要

【研究背景・研究目的】

フィンランドは，ひとり親家庭等の様々な課題を抱える家族の比率が日本よりも格段に高いにもかかわらず,乳幼児期における深刻な児童虐待は極めて少ない。フィンランドにおける虐待予防に関しては，保健師が重要な役割を果たしており,全ての子どもをもつ家族を同じ担当保健師が妊娠中から就学前まで継続支援しており，虐待予防など高い成果を上げている。研究協力自治体の島田市では,2019 年 4 月よりフィンランドの母子保健システムをモデルとして,同じ担当保健師によるすべての子育て家族の継続支援を実施している。本研究の目的は，同じ担当保健師による継続支援を受けている家族（継続支援群）と保健事業ごとに異なる保健師が対応していた家族（非継続支援群）を比較分析し，保護者における専門職への認識ならびに保健サービスに対する満足度に違いが生じるか否かを明らかにすることである。

【研究方法】

対象者は，2019 年 10 月から 2022 年 3 月の 1 歳 6 か月児健康診査対象児の 1341 人の保護者であり，保護者の専門職への認識や保健サービスの利用状況について自記式質問紙を用いて調査した。本研究は，本研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【研究結果】

本研究の対象者 655 人から回答を得た（回収率 59%）。継続支援群の保護者は，非継続支援群の保護者に比べ，各種保健事業に対する満足度が有意に高かった。継続支援群の保護者は，非継続支援群の保護者に比べ，子どものことで相談できる専門職がいると回答した者の割合が有意に高く，かつ利用可能な育児サービスの内容の理解度が高い者の割合も有意に高かった。ロジスティック回帰分析の結果，他の要因を調整しても，担当保健師による継続支援は，子どものことで相談できる専門職がいるという保護者の認識や利用可能な育児サービスの内容の理解度と有意に関連していた。

Ⅱ．　委員会活動

１．　闘病記文庫
２．　広報活動
３．　看護実践研究センター運営委員会活動報告
４．　会計報告

1. 闘病記文庫

闘病記には、闘病する人自身や家族が病気にかかった時、どのような日々を送り、何を感じ考えたかの闘病体験が記されている。単なる医学的な知識としての情報だけでなく、人が病気を抱えた時にどう生きていくのかという貴重な情報源となっている。医療や介護を学ぶ学生にとっては、これまで長きに亘り、病とともに生きる人を理解し、ケアを実践していくうえでの手がかりとなっていた。闘病記文庫の活動は、羽曳野図書センターから、阿倍野医学図書館に管理が移行されることに鑑み、2024年度末をもって終了することになった。

1. 利用実績（表１）

羽曳野キャンパスに通学する学生が減少した時期にも関わらず、従来と同等の利用者数、利用冊数があった。

表１　利用実績

	2024年度の利用状況（2024/4/1～2025/1/31）		2023年度の利用状況（2023/4/1～2024/1/31）		2022年度の利用状況（2022/4/1～2023/1/31）		2021年度の利用状況（2021/4/1～2022/2/28）	
教員	25人	25冊	1人	1冊	2人	4冊	2人	３冊
学域生	236人	243冊	390人	480冊	229人	548冊	202人	456冊
大学院生	11人	11冊	5人	5冊	7人	8冊	３人	４冊
非常勤職員	2人	2冊	22人	22冊	4人	30冊	４人	14冊
職員	0人	0冊	0人	0冊	0人	0冊	0人	0冊
卒業生	0人	0冊	0人	0冊	0人	0冊	１人	1冊
学外利用者	7人	7冊	0人	0冊	1人	1冊	0人	0冊
計	281人	288冊	418人	508冊	243人	591冊	212人	478冊

※2024年11月11日～一部資料について再装備作業のため利用不可であった。

2. 移管状況（表２）

闘病記文庫2,040冊のうち、阿倍野図書館には1,605冊を移管した。88冊は広く地域住民の手に届くよう、大阪市立図書館、羽曳野市図書館に寄贈した。寄贈先からも「貴重な資料として、広く市民の利用に供していきたい」との連絡があった。

表２　闘病記文庫書籍　移管状況

阿倍野図書館移管	寄贈		教員引渡し	廃棄	合計
	大阪市立図書館	羽曳野市立図書館			
1605	44	44	121	226	2040

闘病記文庫の利用により、病とともに生きる人の心の機微を理解し、生活、人生に寄り添うことができた在校生、卒業生が、医療・保健・福祉などそれぞれ置かれた場所でその学びを発揮されんことを祈念したい。

担当：井上敦子、古山美穂

2. 広報活動

看護実践研究センターの広報活動として、センター開設 3 年目に当たる令和 6 年度は、広報用パンフレットとホームページの更新及び、パンフレットの関連機関への配布を行った。

1) パンフレット

今年度は昨年度作成したパンフレットを基に、本年度の活動の内容を盛り込んだパンフレットを作製した。具体的には本年度に開講された健康講座やとなりの保健室、防災健康支援プロジェクトといった「府民健康支援」や、看護職医療福祉職の方の為のセミナーや CNS ネットワーク交流会等の「看護生涯学習支援」の活動の内容と活動日時、申し込み窓口の情報を盛り込んだ。「国際・国内学術研究推進」部門で助成を行った研究については、研究課題名を掲載した。なお、掲載内容については、担当教員に確認を依頼し、適宜追加修正した。完成したパンフレットは、ホームページにアップすると共に、実習施設や卒業生・修了生の所属する関連機関に郵送により配布した。郵送先は、病院、保健所、訪問看護ステーション、社会福祉施設等の合計 2200 施設となった。

2) ホームページ

本センターの活動を広く周知すべく、各部門で行われる活動内容について紹介した。また活動日が指定されている活動については、その都度内容を更新した。

https://www.omu.ac.jp/nurs/institutions/

※次頁からパンフレットを添付する。

国際・国内学術研究推進部門

国際・国内学術研究推進部門では、看護生涯教育における研究への支援、Society5.0の実装に向けた保健医療福祉ケアデータ科学の国際的学術拠点に則した国際的な研究への支援を行っています

2024年度は3課題研究の支援を行っております

入院患者の音環境を整える為のベストプラクティスの構築

同じ担当保健師の継続支援と乳幼児を持つ保護者の専門職への認識との関連

地域在住高齢者における骨盤底フレイル対策と便秘の関連要因
-前期高齢者と後期高齢者の比較-

CNSネットワーク交流会

WEB開催 7月27日（土）10時～11時30分
倫理調整力をみがき倫理的感受性をはぐくむ組織作り
［担当］がん看護CNS　徳岡　良恵

WEB開催 8月24日（土）10時～12時
看護管理者へのコンサルテーションと支援
［担当］精神看護CNS　冨川　順子

対面開催 10月19日（土）10時～12時［会場］I-siteなんば
地域包括ケアにおけるCNSの役割
［担当］地域看護CNS　三輪　恭子

WEB開催 12月14日（土）10時～11時30分
CNS実践とコラボレーション
［担当］家族支援CNS 井上　敦子

WEB開催 2025年2月15日（土）10時～11時30分
CNSはいかにして役割開発していくのか
［担当］慢性疾患看護CNS　中村　雅美

各回すべて無料です。お申込みは右記QRコードから

府民健康支援部門

府民健康支援部門では、地域の皆さまの健康増進、疾病・介護予防、療養管理など無料でご相談の場を設けています

発達障がいをもつ子どもの養育者・保健医療従事者への勉強会

発達障がいをもつお子様の養育者の方、発達障がいをもつ子ども達を支援する保健医療福祉関係者の方に向けた勉強会です

対象 発達障がいを持つ子ども（5歳～12歳（小学6年生）まで）の養育者、または発達障害をもつ子どもを支援する看護師、保健師、養護教諭、保育士等の保健医療福祉関係者 先着20名
（※定員となったため申込を締切ました）

開催日 2024年9月11日（水）PM13時～PM15時

開催場所 I-siteなんば 又はZoomオンライン
（大阪市浪速区敷津東2-1-41）

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科　精神看護学
奥野 裕子　Mail：okuno.h@omu.ac.jp

暮らしの保健室

地域の方に向けた健康講座や、暮らしや健康に関する相談窓口を月に1回開催いたします。お気軽にお越しください。

対象 ご興味のある方はどなたでも　各回先着10名様

開催日 2024年8月～2025年1月の間に月に1回開催予定
※各回詳細は看護実践研究センターHPでご案内いたします

開催場所 ライブラリとなり
（大阪府羽曳野市羽曳が丘3丁目5-37）

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科 在宅看護学
三輪 恭子　Mail：kmiwa@omu.ac.jp

健康・防災サポートプロジェクト

自治体・地区組織と連携し、健康相談や健康測定会などを開催致しますので、お気軽にお越しください。

対象 ご興味のある方はどなたでも

開催日 2024年9月～11月の間に開催予定
※詳細は看護実践研究センターHPでご案内いたします

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科 地域看護学
田中 健太郎　Mail：ktanaka@omu.ac.jp

大阪公立大学大学院看護学研究科

看護実践研究センター

Nursing Practice and Reserch Center

看護生涯学習支援

国際・国内学術研究推進

府民健康支援

大阪公立大学

地域包括支援センター看護職のネットワーク交流会

活動の状況を共有し横のつながりをもつこと、お互いを理解しあって、明日への活力につなげる事を目的に交流会をしています

参加費 無料

対象 地域包括支援センター職員

開催日 2024年10月19日（土）AM10時～AM11時
関係機関との自立支援　事業所の意識を変えるには？
2025年2月15日（土）AM10時～AM11時
当事者・家族・地域住民の意識を変えるには？
「予防」という考え方の啓発

お申込 看護実践研究センター公開講座HP
https://www.omu.ac.jp/nurs/center

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科　在宅看護学
岡野　明美　Mail：a-okano@omu.ac.jp

看護職のための継続教育実践講座

看護教育に関する基本的な理論を学び、継続教育における実践方法について考えてみましょう

1講座 500円

対象 看護職　先着各回20名

開催日 2024年10月9日（水）13時30分～15時30分
『正統的周辺参加論とメンタリング』
2024年11月25日（月）13時30分～15時30分
『成人学習理論の看護における活用』
2024年12月4日（水）13時30分～15時30分
『臨床判断モデルとルーブリックの活用』

開催場所 I-siteなんば
（大阪市浪速区敷津東2-1-41）

申込み

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科　看護教育学
勝山　愛　Mail：katsuyamai@omu.ac.jp

精神看護オンラインセミナー

精神医療を支える看護職の方に向けたZoomを活用した無料のオンラインセミナーです。

受講料 無料

開催日 2024年9月30日（月）13時～14時30分
『統合失調症をもつ当事者に対する心理教育の基本』
2024年12月23日（月）13時～14時30分
『発達障がい児・者へのケアの工夫』
2025年2月4日（火）13時～14時30分
『精神科における身体合併症への看護』
2025年4月22日（火）13時～14時30分
『当事者のニーズにこたえる精神科訪問看護』

お申込 https://www.omu.ac.jp/nurs/center/application/profession/mhonline/index.html

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科　精神行動ケア科学
河野　あゆみ　Mail：kohno.ayumi@omu.ac.jp

2024年度　家族看護フォーラム

多様な家族への支援をテーマに、家族看護フォーラムを開催いたします。対面による講義と事例紹介を行います。

参加費 1000円

対象 臨床看護師　先着80名

開催日 2024年11月10日（日）PM14時～PM16時
家族看護フォーラム
『多様な家族への支援を考える』

開催場所 I-siteなんば
（大阪市浪速区敷津東2-1-41）

お申込 https://www.omu.ac.jp/nurs/center/contact/2023_.html
看護実践研究センター公開講座HP

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科　家族看護学
家族への看護を考える会：gr-nurs-family@omu.ac.jp

未来を拓く！基礎から学ぶ看護研究セミナー（基礎編）

看護教育に関する基本的な理論を学び、継続教育における実践方法について考えてみましょう

全3回 3000円

対象 医療保健介護福祉施設に所属する看護職
先着10名程度

開催日 2024年10月18日（金）10時～16時
『看護研究とは、文献検討の進め方』
2024年11月8日（金）10時～16時
『研究計画から実施・論文作成』
2024年12月6日（金）10時～16時
『研究計画の発表と意見交換』

申込み

開催場所 大阪公立大学阿倍野キャンパス　看護学部学舎

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科 ヒューマンケア科学
細名 水生　Mail：hmio@omu.ac.jp

研究の実態・分析・成果のプロセスを学ぼう（継続編）

未来を拓く！基礎から学ぶ看護研究セミナーを受講していただいた方の継続セミナーです。より深く看護研究を学びましょう。

全3回 2000円

対象 2022年度、2023年度に基礎編を受講した方

開催日 2024年9月20日（金）10時～16時
『研究デザインの選択、データ収取方法、分析方法』
2024年11月12日（火）10時～16時
『分析手法の手法と実際』
2024年12月9日（月）10時～16時
『研究成果のプロセスと発表の実際』

申込み

開催場所 大阪公立大学阿倍野キャンパス　看護学部学舎

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科 ヒューマンケア科学
細名 水生　Mail：hmio@omu.ac.jp

がん看護インテンシブコース

様々なライフステージにあるがん患者の抱える課題について理解し、がん患者が課題を克服できるよう支援を考案し、実践できるようになることを目指します。

参加費 無料

対象 がん看護に携わる看護職者、看護系大学院生で、2日間とも受講可能な方30名

開催日 2024年8月29日（木）PM14時～PM16時30分
『認知症のある高齢がん患者への支援』
2024年9月13日（金）PM14時～PM16時30分
『遺伝性腫瘍を有する患者と家族への支援』
※事後レポートの提出と半年後のアンケートのご協力をお願いします

お申込 https://forms.gle/kPmwNBoVtDX4nAQ7
※すでに定員に達している場合がございます

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科
がんプロ事務局　gr-nurs-ganpro@omu.ac.jp

クリティカルケア看護実践講座（ハイブリッド開催）

クリティカルケア領域において倫理的配慮を必要とする患者・家族への看護実践の質向上を目指した講座です。

参加費 1000円

対象 看護師経験3年以上のクリティカルケア部門および病棟部門で重症患者の看護実践にかかわる看護師100名（オンライン参加定員は20名）

開催日 2024年12月23日（月）9時30分～16時30分

テーマ 『クリティカルケア領域の倫理的配慮に活かす看護理論と実践』
『クリティカル領域で行う看護研究と実践への活用』

開催場所 I-siteなんば（大阪市浪速区敷津東2-1-41）

お問合せ 大阪公立大学大学院看護学研究科
クリティカルケア看護実践講座事務局
gr-nurs-ccn@omu.ac.jp

看護生涯学習支援部門では、看護師・保健医療福祉職の専門職の方に向けたセミナーなどを開催しています。詳しくはHPをご覧ください。

看護生涯学習支援部門

大阪公立大学大学院看護学研究科
看護実践研究センター
https://omu.ac.jp/nurs/institutions/

看護職のための継続教育実践講座

日　程　『正統的周辺参加論とメンタリング』　2024年10月9日（水）13時30分～15時30分
『成人学習理論の看護における活用』　2024年11月25日（月）13時30分～15時30分
『臨床判断モデルとルーブリックの活用』　2024年12月4日（水）13時30分～15時30分

対　象　看護職　先着順各回20名　受講料　各回500円（3講座とも受講で1500円）

開催場所　I-siteなんば（大阪市浪速区敷津東2-1-41）

問合せ　大阪公立大学大学院看護学研究科　看護教育学　勝山　愛　Mail：katsuyamai@omu.ac.jp

精神看護オンラインセミナー

日　程　『統合失調症をもつ当事者に対する心理教育の基本』　2024年9月30日（月）13時～14時30分
『発達障がい児・者へのケアの工夫』　2024年12月23日（月）13時～14時30分
『精神科における身体合併症への看護』　2025年2月4日（火）13時～14時30分
『当事者のニーズにこたえる精神科訪問看護』　2025年4月22日（火）13時～14時30分

開催方法　Zoomによるオンライン開催（お申し込み後ZoomのURLをメールにて配信いたします）

受講料　無料

問合せ　大阪公立大学大学院看護学研究科　精神行動ケア科学　河野　あゆみ　Mail：kohno.ayumi@omu.ac.jp

家族看護フォーラム

日　程　家族看護フォーラム『多様な家族への支援を考える』　2024年11月10日（日）PM14時～PM16時

対　象　臨床看護師　先着順80名　受講料　1000円

開催場所　I-siteなんば（大阪市浪速区敷津東2-1-41）

問合せ　大阪公立大学大学院看護学研究科　家族看護学　家族への看護を考える会：gr-nurs-family@omu.ac.jp

未来を拓く！基礎から学ぶ看護研究セミナー（基礎編）

日　程　『看護実践に活かす看護研究とは、文献検討とテーマの決定』　2024年10月18日（金）10時～16時
『看護研究の計画から実施、論文作成まで』　2024年11月8日（金）10時～16時
『各自の研究計画書の発表とディスカッション及び指導』　2024年12月6日（金）10時～16時

対　象　医療保健介護福祉施設に所属する看護職　先着順10名程度

開催場所　大阪公立大学阿倍野キャンパス　看護学部学舎　受講料　全3回　3000円

問合せ　大阪公立大学大学院看護学研究科　ヒューマンケア科学　細名　水生　Mail：hmio@omu.ac.jp

研究の実態・分析・成果のプロセスを学ぼう（継続編）

日　程　『研究デザインの選択、データ収集方法、分析方法について』　2024年9月20日（金）10時～16時
『分析手法の手法と実際』　2024年11月12日（火）10時～16時
『研究成果のプロセスと発表の実際』　2024年12月9日（月）10時～16時

対　象　昨年度までに基礎編を受講済みの方　先着順10名程度

開催場所　大阪公立大学阿倍野キャンパス　看護学部学舎　受講料　全3回　2000円

問合せ　大阪公立大学大学院看護学研究科　ヒューマンケア科学　細名　水生　Mail：hmio@omu.ac.jp

がん看護インテンシブコース

申し込み

日　程　第1回『認知症のある高齢がん患者への支援』　2024年8月29日（木）14時～16時30分
第2回『遺伝性腫瘍を有する患者、家族への支援』　2024年9月13日（金）14時～16時30分

対　象　がん看護経験のある看護師・看護系大学院生で2回とも受講ができ、アンケートに回答をいただける方

開催場所　I-siteなんば（大阪市浪速区敷津東2-1-41）　受講料　無料

問合せ　大阪公立大学大学院看護学研究科　がんプロ事務局：gr-nurs-ganpro@omu.ac.jp

クリティカルケア看護実践講座（ハイブリッド開催）

日　程　2024年12月23日（月）9時30分～16時30分

対　象　看護師経験3年以上のクリティカルケア部門および病棟部門で重症患者の看護実践にかかわる看護師
先着順100名（オンライン参加定員は20名）

開催場所　I-siteなんば（大阪市浪速区敷津東2-1-41）　受講料　1000円

問合せ　大阪公立大学大学院看護学研究科　クリティカルケア看護実践講座事務局　gr-nurs-ccn@omu.ac.jp

地域包括支援センター看護職のネットワーク交流会

活動の状況を共有し横のつながりをもつこと、お互いを理解し、明日への活力につなげる事を目的に交流会をしています。
詳細は、看護実践研究センターHPにてご案内しております。

大阪公立大学
Osaka Metropolitan University

大阪公立大学大学院看護学研究科
看護実践研究センター
人材育成事業

看護実践研究センターHP

公開講座申し込みHP

文責：看護実践研究センター運営委員会 広報担当　藤田寿一　山口舞子　柱谷久美子

3. 看護実践研究センター運営委員会活動報告

第１回　運営委員会		
4 月 23 日 （火）	参加人数	13 名
	時　　間	11:00～12:00
	議　　事	▪ 役割分担について ▪ 活動計画・予算案について ▪ 研究・活動支援事業について ▪ その他
	内　　容	<u>センター組織（役割分担）</u> センター長：田中教授 主　　任：三輪教授 副　主　任：横山教授（府民健康支援部門） 森本教授（国際・国内学術研究推進部門） 細名准教授（看護生涯学習支援部門） 広　　報：藤田准教授　山口（舞）講師　柱谷助教 闘病記文庫：古山准教授　井上（敦）講師 年　　報：奥野准教授　大泉准教授 会　　計：田中（健）准教授　佐竹准教授 備 品 管 理：徳岡講師　中村講師 <u>予算計画</u> ・研究、活動支援事業の予算は各部門×5 件、計 15 件 225 万円とし、募集をする。 ・広報活動費は、センターのリーフレット、チラシの印刷郵送費、CNS ネットワークのチラシ印刷郵送費、および関連する文具消耗品等 306,150 円とする。 ・闘病記文庫の活動費は、広報用チラシ、ポスターの印刷費 10,140 円とする。 ・CNS ネットワーク活動に従事する事務員の雇用費は約 30 万円とする。 <u>研究・活動支援事業</u> 募集要項は昨年度検討された要項を引き続き活用し、６月初旬に募集案内、申請書の提出期限は 6 月 28 日とする。
第１回　部門長会議		
7 月 9 日 （火）	時　　間	16:00～17:00
	議　　事	2024 年度看護実践研究センター研究・活動支援審査について
	内　　容	・2024 年度看護実践研究センター研究・活動支援事業に看護生涯学習支援部門 7 件、府民健康支援部門 3 件、国際・国内学術研究推進部門 3 件の申請があり、予算額 2,250,000 円に対し、申請額の合計は 2,249,006 円であった。 ・申請者に対して決定した助成額にて採択通知をメールにて発行することが確認された。 ・次年度は予算の振り分けを部門ごとに行うことを検討する。

第2回　運営委員会		
12月9日 （月）	参加人数	16名
	時　　間	17:00～17:50
	議　　事	▪2024年度看護実践研究センター研究・活動支援について ▪その他
	内　　容	<u>闘病記文庫の移管、移管対象外図書の取り扱いについて</u> ・阿倍野医学図書館へ資産図書として移管が決まっている闘病記文庫は、現在移管作業中で1月下旬に終了予定であり、移管外図書については一般の図書館へ希望があれば寄贈し、その他のものについては教員や学生にリストを公開し、希望者に渡すこととする。なお、残った図書については学術情報課と相談の上廃棄とする。 ・次年度からは阿倍野医学図書館の資産図書となるため、委員会で検討した結果、闘病記文庫の活動は今年度を持って終了することが承認された。 <u>報告会について</u> ・2024年度の報告会は2025年3月21日（金）AM9時30分からに決定した。 <u>0棟の備品について</u> ・羽曳野キャンパス 0 棟にある資産管理されている備品については、事務所から希望のあったものは移管予定、その他のものはリユースに出品中であり、期限内に希望がなかった場合は廃棄処分とする。 <u>年報および会計報告について</u> ・年報第3巻の執筆要項案が承認され、12月中に各担当者へ年報執筆及び成果報告書の提出依頼を行うことが確認された。 ・会計報告並びに年報の締め切りは2025年2月末とする。 <u>CNSネットワーク活動</u> ・今年度はメールマガジンの配布および交流会を開催しており、全5回の交流会のうち3回まで終了済みであり、30名程度の参加者がいることが報告された。
第3回　運営委員会		
3月18日 （火）	参加人数	11名
	時　　間	13:00～14:00
	議　　事	各部門および各担当の今年度の振り返りと次年度の課題について
	内　　容	各部門担当長から今年度の振り返りと次年度に向けた課題について報告がなされた。また、各業務担当者からも同じく報告がなされた。 　次年度に向けては参加者全員から意見があげられ、対象者の益になる研究活動を行い、研究活動の幅を広げていくことが検討された。
2024年度看護実践研究センター研究・活動助成事業報告会（参加数46名）		
3月21日 （金）	時　　間 9:30～	CNSネットワーク活動、看護生涯学習支援部門、府民健康支援部門、国際・国内研究推進部門それぞれ今年度の研究活動について報告がなされた。

４．会計報告

（１）2024年度 運営委員会の予算執行状況

予　算　（細　目）	予算額（円）	受講料収入（円）	執行額（円）	残額（円）
委員会運営費	615,698		598,191	17,507
研究・活動助成	2,249,006	171,500	1,997,897	422,609
小計	¥2,864,704		¥2,596,088	¥440,116

（２）会計総括

委員会運営費で計上した「闘病記文庫（整備・広報）」ついては、阿倍野医学図書館の資産図書としての移管作業を行ったため、予算執行はなかった。研究・活動助成については、全体の研究活動申請額が予算を超過したため、減額の調整を行った。また研究助成１件が中止となり残額が増加したが、予算全体としては概ね予算通りかつ適正な執行であった。次年度は学舎統合による予算計画の検討が必要である。

看護実践研究センター 会計担当：佐竹陽子　田中健太郎

Ⅲ. CNS ネットワーク活動

2024年度 看護実践センターCNSネットワーク活動部会

構成員：三輪恭子（委員長）、冨川順子、井上敦子、徳岡良恵、中村雅美、佐々木勤美（事務）

Ⅰ．2024年度の活動目標

1．会員への情報発信として、メールマガジンの発刊を行う。

2．専門看護師（以下CNS）・プレCNS会員のCNS活動実践能力の向上と交流促進に役立つ「CNSネットワーク交流会」を開催する。

Ⅱ．2024年度活動内容

1．会員数

2025年2月の会員登録数は128名であった。

2．会員への情報発信

修了生への広報、交流会案内チラシ発送、メールマガジン発刊、HP更新等による会員への情報発信を行った。なお、メールマガジンは会員と看護学部教員を対象に発刊した。

1）交流会の案内とメールマガジン発刊

2024年は6回のメールマガジンを発刊し（表1），2024年度CNSネットワーク交流会のチラシ作成と配布、交流会の開催・終了後の情報と、CNS活動に関連するセミナー等の情報発信を行った。

発刊月ごとに各構成員がメールマガジンの作成を担当し、各構成員の挨拶や交流会の案内と報告を中心に、CNS活動に役立つセミナーの案内、１月にはCNS合格者の声などを盛り込み、内容の充実を図った。今後もCNS活動に活かせる最新情報などを発信することにより、会員にとって役立つメールマガジンとして更なる内容の充実を図ることが課題である。

表１．2024年度メールマガジン発刊時期と内容

回数	発刊月	内容
第1回	7月	今年度の挨拶、CNSネットワーク活動企画案内、第1回交流会の案内
第2回	7月	第1回交流会の報告、第2回交流会の案内
第3回	9月	第2回交流会の報告、第3回交流会の案内 羽曳野キャンパスクロージングセレモニーのお知らせ
第4回	11月	第3回交流会の報告、第4回交流会の案内
第5回	1月	今年度CNS認定審査の合格者の声、第5回交流会の案内
第6回	3月	第5回交流会の報告、今年度の振り返り

2）ホームページによる情報発信と交流

旧大阪府立大学のホームページ機能で、CNS会員の検索を行ったり、会員同士のピアコンサルテーション機能を活用できるが、利用者はいなかった。会員同士のピアコンサルテーションについては、ホームページよりも直接の交流によって行われていると考えられ、ホームページでは他会員を検索する機能の利用のみ行われていた。ピアコンサルテーション機能の大阪公立大学ホームページへの移設は費用上できないことから、これらの機能は今年度で終了する。

大阪公立大学ホームページにて、引き続きCNSネットワークのホームページを開設し、今後は交流会案内などの広報活動と、アンケート報告などの情報発信を中心に行っていく。

3）教員・修了生へのCNSネットワーク広報用チラシの配布

年に１回、３月に修了生対象に、CNSネットワーク広報用チラシの配布（図２）を行った。

図１．2024年度CNSネットワーク交流会案内

図２．CNSネットワーク広報用チラシ

Ⅲ. 会員のための交流会の開催

１．2024年度交流会の概要

2024年度も、CNS会員の能力開発に役立てることができ、会員同士の交流が促進することを目指した交流会を開催した。 各構成員が、CNS活動に役立つテーマの交流会を企画し、オンライン（Zoom）または対面で開催した（表２）。また、対象を、本学修了生以外のCNSやプレCNSにも広げて実施した。

表２．2024年度交流会の概要

	交流会のテーマ	担当	日時	方法
1	倫理調整力をみがき倫理的感受性をはぐくむ組織づくり	徳岡	7月27日(土) 10:00～11:30	オンライン
2	看護管理者へのコンサルテーションと支援	冨川	8月24日(土) 10:00～12:00	オンライン
3	地域包括ケアにおけるCNSの役割	三輪	10月19日(土) 10:00～12:00	対面 (I-siteなんば)
4	CNS実践とコラボレーション	井上	12月14日(土) 10:00～11:30	オンライン
5	CNSはいかにして役割開発していくのか	中村	2月15日(土) 10:00～11:30	オンライン

２．各回交流会の報告

各回の参加者数とアンケート概要から、意見交換できた、参加して良かった、今後の自分の活動に役立つと答えた人数を表３に示す。

表３．交流会のテーマ、参加者数とアンケート結果　　単位（人）

	交流会のテーマ (短縮して記載)	参加者数 (申し込み者数)	アンケート 回収数	意見交換 できた	良かった	役立つ
1	倫理調整	24(34)	16	11	12	10
2	コンサルテーション	26(41)	14	9	10	8
3	役　割	32(40)	22	12	15	13
4	実　践	26(48)	16	5	12	10
5	役割開発	25(59)	14	10	12	10

１）第１回：倫理調整力をみがき、倫理的感受性をはぐくむ組織作り

担当：徳岡良恵

参加者：24名

内容

・担当者による話題提供として、APRNの倫理的意思決定のコアコンピテンシー発達の過程、がん看護専門看護師（以下OCNS）が実践している倫理調整における状況判断と行動、倫理調整を行う上での障壁、能力向上へのポジティブな影響についての研究結果をもとに、OCNSの倫理調整の実際を紹介した。

・ディスカッションは、4名程度のグループで倫理調整をする上での障壁（自身、組織等）、倫理調整の能力向上に役立ったと思うこと、組織において医療職者の倫理的感受性を高めるために　実施したいと思う、もしくは、実施している取り組みについてなどをテーマとして実施した。

参加者の反応

・ディスカッションを通して倫理調整を進める前の組織分析の必要性、方法、工夫点、自分に不足していること、考え方の視点がわかった

・ディスカッションを進めていく中で同じ困りごとを抱えていたり、その困りごとへの具体的な方略を教えてもらったりとても有意義な時間になった

・領域や立場、経験年数の違うCNS同士で話せたことでお互いに学びが深まった

・具体的な打開策や実施している戦略を聞くことができ、行動としてどうすべきかのヒントをたくさん得られた

・ディスカッション時間が長くとってあり良かった

２）第２回：看護管理者へのコンサルテーションと支援

担当：冨川順子

動画協力：八田篤夫（湊川病院　精神看護専門看護師）、樋口頼良（堺市立総合医療センター　精神看護専門看護師）、頼友和平（近畿大学病院　精神看護専門看護師）

参加者数：26名

内容

(動画)精神科病棟に異動した師長と２年目の主任による精神看護CNSへの管理コンサルテーションの場面。相談内容は、病棟での経験年数の長いスタッフがカンファレンス等で非協力的な発言をして他のスタッフを巻き込んで師長と主任の提案に反対することが続いており、このようなチームをどう運営いていけばいいかという相談。その相談への対応として、サイコドラマの手法を用いて起こっている状況の分析、関わっているスタッフの理解、集団精神療法の手法を用いた会の運営方法についての教育を行っているコンサルテーション場面の視聴を行いながら、3 回グループディスカッションを行った。

参加者の反応

動画視聴とグループディスカッションの組み合わせで

・自分だけでは考えられなかったことに気づけた
・あっという間の２時間だった
・先輩、多領域の CNS の方々と意見交換できて、有意義な時間だった
　というように積極的に話し合いは進んだ。動画についても
・コンサルテーションの中で管理者が再現ドラマをするという手法がおもしろかった
・実際の動画を通して、コンサルテーションの具体的な流れについて学べた
・管理者がご自分たちで気づき、管理者が目指すことを大切にしながら、自分たちでやっていくことができるように支援する方法がわかった
・サイコドラマの実践方法も学ぶことができた
　というように好評であった。

３）第３回：地域包括ケアにおけるCNSの役割

担当：三輪恭子
参加者数：32名

内容

病院・地域・教育機関で活躍する3名のCNSより、地域包括ケアや地域共生社会の推進に向けた活動について話題提供していただいた後、ワールドカフェで活発な意見交換ができた。

話題提供者（敬称略）：
①戸石未央（日本赤十字和歌山医療センター，在宅看護CNS）
②藤原由佳（清水メディカルクリニック・神戸大学大学院医学研究科，がん看護CNS）
③後藤智子（泉佐野泉南医師会看護専門学校，在宅看護CNS）

参加者の反応

・様々な分野の先輩方が、様々な場所で地域包括ケアシステムにおける実践をされていて、とても刺激を受けた。
・対面の方が学びが深まると感じた。さらに実際に名刺交換できるというメリットもあるかと思う。
・地域包括において、訪問看護ステーションで所属されている方からの視点であるとか、臨床でどのようにかかわる必要があるのか考えることに繋がった。
・起業を考えておられる方や自分と同じような役割を担っておられる方のお話しを聞けて、未来の自分のCNSとしての活動の参考になった。あちこちで活躍されていて良い刺激をもらった。ポジティブにがんばっていこうと思えた。
・学生で参加させていただいた。先輩CNSの活動や困りごと、課題など沢山参考になる話を聞かせていただき、今後の活動へのイメージ形成につながった。

４）第４回：CNS実践とコラボレーション

担当：井上敦子
参加者：26名

内容：

『CNS実践とコラボレーション』をテーマに、3名の家族支援専門看護師から、「病棟看護師とのコラボレーション」、「病棟師長の立場におけるコラボレーション」、「外来におけるコラボレーション」について、実践事例を交えて話題提供をいただいた。

その後、少人数のグループに分かれて情報共有を行った。

参加者の反応

・他職種や多機関とどのように協働していくか、事例を通して学ぶことができ、勉強になりました。グループディスカッションでは、CNSとして、どのような視点を持って実践や協働していくか（CNSとしての自分と一スタッフとしての自分との棲み分けについてなど）を深めることができました。その都度、リフレクションして実践を振り返っていくことが重要だと学ぶことができました。

・組織や役割が異なる3名のかたの情報提供がとても興味深かったです。どの発表も「同じ悩みだなー」「わかる！」と思うことがあり、勉強になりました。

・他大学の修了生ですが、このような会に参加させていただき、他のCNSの方と交流することで、自身の活動の参考にさせていただいています。

5）第5回：CNSはいかにして役割開発していくのか

担当：中村雅美

参加者数：25名

内容

「CNSはいかにして役割開発していくのか」をテーマに、慢性疾患看護専門看護師（滋賀県立総合病院 後藤絹様）からの話題提供後グループに分かれ、役割開発における悩みや課題、工夫点、大切にしていることなどを話し合った。

参加者の反応

・それぞれの環境でCNSとして活躍されているお話を聞くこと、自分の状況を語ることで、現状を客観的に見るきっかけをいただけたと思う。これまでの活動の中でできていること、できていなかったこと、これから取り組むべきことを整理して考えていきたいと感じた。

・CNSの認定を受けて間もない時期で、職場にはベテランのCNSも勤務されている中で、自分自身がどのように役割をとっていくことができるのか、漠然と課題を感じながら、何もできていないのではないかと焦りも抱く日々を送っていた。交流会を通して、分野や場所、与えられた役割は異なっていても、皆さんが自身の立場から日々の実践を通して課題を見出し、活動につなげられていることを学び、明日からの力をもらったように感じている。

・焦らないように意識していたものの、「CNSになったから」という焦りがあることに気づいた。仲間を増やす、巻き込む、巻き込まれる、名前を覚える、実践を見せる。これらを一つ一つ丁寧に対応していくことが重要だと再認識した。非常に為になる機会だった。

３．交流会についての今後の課題

今年度の交流会も、対象を本学修了生以外にも広げたことにより、例年より参加者数が増加し、活発な交流ができた。また、オンラインでの開催により、全国からの参加があり、参加しやすさという点でよかったと考える。一方で、第３回は対面で開催したが、リアルに出会うことで名刺交換ができ、ディスカッションがしやすいといった点で、より活発な交流ができた。オンライン・対面とも、参加者からは、CNS活動に関する知識・技術のブラッシュアップやモチベーションの向上につながったという感想があり、CNS活動を支援する場の提供となったと考える。さらに、CNS資格取得を目指す学生やプレCNSとっても、CNSの実際の活動を知ることで、より実践的な学びの機会となっていた。

今後は、より参加者のニーズに合った交流会を行っていくために、今後の医療の動向をふまえたテーマの選定や、開催方法の検討をしていきたい。

Ⅳ．2025年度の活動に向けて

次年度も、今年度の課題を検討しながら、会員へのメールマガジンの発刊、交流会企画を中心にした活動を継続するとともに、会員同士の交流をより活発化させる方略について模索する。

資料

規定

(1) 大阪公立大学大学院看護学研究科 看護実践研究センター規程

(2) 大阪公立大学大学院看護学研究科 看護実践研究センター運営委員会規程

大阪公立大学大学院看護学研究科　看護実践研究センター規程

令和４年４月１日

規程第116号

（趣旨）

第１条　この規程は、大阪公立大学大学院看護学研究科規程第１２条第１項の規定に基づき、地元創成を目指す看護の研究・教育・実践を推進し、地元の看護の発展及び人びとの健康と生活の質向上に寄与するとともに、国際的学術拠点として国際的な学術研究活動を促進するため、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（業務）

第２条　センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

(1)　研究支援に関すること。

(2)　地域貢献に関すること。

(3)　人材育成に関すること。

(4)　学術研究に関すること。

(5)　その他センターに関し必要なこと。

（運営）

第３条　センターの円滑な運営を図るため、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する事項は別に定める。

（組織）

第４条　センターに所長、主任、副主任及び研究員を置く。また、共同研究等を行うために学外研究員を置くことができる。

２　所長は、看護学研究科長（以下「研究科長」という。）をもって充てる。

３　主任及び副主任は、看護学研究科教授会の構成員の中から、研究科長が任命する。

４　研究員は、看護学研究科教員の中から、委員会の推薦に基づき研究科長が任命する。

５　学外研究員は、委員会の推薦に基づき研究科長が委嘱する。

（所長）

第５条　所長は、センターの業務を統括する。

２　主任は、センターにおける研究・教育に関する業務を行うとともに、所長を補佐し、所長に事故があるときは、その職務を代行する。

３　副主任は、センターにおける研究・教育に関する業務を行うとともに、主任を補佐する。

（任期）

第６条　主任及び副主任の任期は２年とする。ただし、再任は妨げない。

２　研究員の任期は１年とする。ただし、再任は妨げない。

３　学外研究員の任期は１年とする。ただし、再任は妨げない。

（委任）

第７条　この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

附　則

この規程は、令和４年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、令和５年４月１日から施行する。

大阪公立大学大学院看護学研究科　看護実践研究センター運営委員会規程

令和４年４月１日

規程第23号

（趣旨）

第１条　この規程は、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター規程第３条第１項の規定に基づき、大阪公立大学大学院看護学研究科看護実践研究センター運営委員会（以下「委員会」という。）に関し必要な事項を定めるものとする。

（職務）

第２条　委員会は、次に掲げる事項について審議する。

(1)　事業計画に関すること。

(2)　予算に関すること。

(3)　その他、看護実践研究センターの管理運営に関すること。

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　看護実践研究センター所長

(2)　看護実践研究センター主任

(3)　看護実践研究センター副主任　３名（看護生涯学習支援部門、府民健康支援部門、国際・国内学術研究推進部門の各部門責任者を兼務）

(4)　研究科教授会が選出した看護学研究科の教員　９名（看護生涯学習支援部門、府民健康支援部門、国際・国内学術研究推進部門の各部門に３名ずつ配置）

(5)　前各号に掲げる者のほか、委員会が必要と認める者

２　前項の委員は所長が任命する。

（任期）

第４条　前条第１項第４号及び第５号の委員の任期は２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

２　前項の委員は、再任されることができる。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置く。

２　委員長は、看護実践研究センター主任をもって充てる。

３　委員長は、委員会の議長となる。

４　委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、看護実践研究センター副主任が

その職務を代行する。

（会議）

第６条　委員会の会議は、委員長が招集し会議を掌理する。

２　委員会は、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができない。

３　委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

第７条　委員長は必要あると認めるときは、委員会に学識経験者等委員以外の者の出席を求め意見を聴くことができる。

（委任）

第８条　この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附　則

この規程は、令和４年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、令和５年４月１日から施行する。

編集後記

2022 年 4 月に大阪公立大学が開学し、2 年目を迎えました。大阪府立大学療養学習支援センターは、看護実践研究センターとして新たに生まれ変わり、地域貢献や研究支援、人材育成や国際学術研究等に関する事業を行っております。今後も地域社会における大学の役割を果たすべく、多様な活動を推進してまいります。ご多忙な中、年報第 3 巻の発刊にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

看護実践研究センター　年報担当　奥野 裕子

大阪公立大学大学院看護学研究科
看護実践研究センター年報
第 3 巻
2025 年 3 月発行

編集　大阪公立大学大学院看護学研究科
　　看護実践研究センター運営委員会
発行　大阪公立大学大学院看護学研究科
　　看 護 実 践 研 究 セ ン タ ー

阿倍野キャンパス：大阪市阿倍野区旭町 1－5－17
羽曳野キャンパス：羽曳野市はびきの 3－7－30